

くさのいほに足さしのべてをやまだのかはづのこゑをきくがよろしも

等をはじめとして、歌にも詩にも、これまで讀んだおぼえない佳い作もかなりあつたが、それらは後で別に寫させて貰ふことにして、最後に小林翁が最も大切にされてゐられるらしい六尺屏風二双に詩と歌とを書いてある、最も代表的な良寛の筆蹟を見せて貰つた。私はこれまで良寛の詩や歌や人格に對しては、随分とはげしい崇敬の念を持ち、多少の理解を持ち得て来たとは思ふが、書については一向に無知であつた。それが斯うして目のあたり多くの代表的な筆蹟を見せて貰つてゐるうちに、いつしか私の眼がこれ迄知らなかつた新しい世界に向つて開けて来たやうに思はれた。書の技巧上のテクニクの事は私にはわからないけれども、良寛の書が彼の歌や詩に於けると同じく彼自らの力強い表現である事が理解された。私の心には彼の書を通じて、彼自身の崇高な超越的人格が、さながらに表現されてゐるのが見えるやうな氣がした。しかも、彼の書の一枚一枚に、それを書いた時々の彼自身の氣分の變化が、鮮やかに現はれて居るのが感じられた。良寛の書に對して居ることは、良寛の書いた字に對してゐることよりも、むしろ良寛の内部の「人」に對してあるやうに感じられた。私はこれまでにこれほど全人格的な、即ち藝術的な字を見たことがなかつたやうに思ふ。この新しい世界を私の前に開いてもらつただけでも、私は小林翁その人に深い感謝を捧げなければならぬわけである。

こんな風にして、小林翁の許で、私は三時間餘を過した。しかし、私自身とにかく、非常の暑さの中で老體の翁をかうして煩はすことがひどく濟まないやうな氣がしたので、私は離れがたない思ひに引かされたが、やがて暇を告げることにした。小林翁はあまり多くを語る人ではなかつたが、言葉少いうちにぼつり／＼と話してくだすつた良寛その人の藝術や人格についての翁自身の知識や感想の斷片の多くは、翁その人の人柄から受けた

感銘と共に、私には得難い心の寶であつた。

辭して階下に下りると、翁は再び先刻の茶の間へと私を呼び入れて、最後に良寛の念持佛であつた小さな觀音の木像と石地藏とを佛壇の中から出して示された。そして觀音像には良木といふ作者の銘があり、石地藏は與板のある石屋の刻んだものだと云ふことを話された。しかし、私にはその場合彫刻者の誰であるかと云ふ事や、彫刻の藝術的價値と云ふよりも、むしろそれが良寛その人の信仰の一つの表象として、その二個の佛像が一段と崇嚴に感じられた。私は襟を正して禮拜せずには居られなかつた。

小林翁の許を辭して、再び落葉氏を訪ね、伴はれて新潟市の一角を三十分ほどの時間を費して見物してから信濃河畔のとある家で夕食を喫し、直に又西蒲原地方へと引き返した。

七月十三日

早朝車を雇つて巻町を出た。僕とは舊知の間柄で目下同町在住の高橋重四郎氏に頼んで寫眞機を携へて同行して貰ふことにした。快い夏の朝の風を浴びながら、車は平らな田中の道を、彌彦山の方へと走つた。僅か一里餘の道のりで、私達はもう彌彦からつゞいた小山の麓の森かげの道へ分け入つた。その道はずつと山際に沿うて走つて居り、その道に沿うて幾つかの村落が山を背にしてつくられてゐるのであつた。それらの村落のうちで、先づ第一に私達の注意を惹いたのは岩室と云ふ、稍々町がかつた村であつた。

此の村は昔から女を相手の遊び場として有名な村で、今日でも殆んど軒並にさうした稼業を営む家がつゞいて居るのであつた。けれども今の私にとりては、その岩室と云ふ名がさうした事でよりも、もつと深く心を動かす

事が他に一つあつた。それは矢張良寛に關してゝあつた。良寛の數多い歌の中で特に私の忘れ難い幾つかの歌のうち、此の「岩室」と云ふ響のいゝ土地の名が詠ゆ込まれてゐるのであつた。

岩室の田中に立てる一つ松の木けさ見れば時雨の雨に濡れつゝ立てり

一つ松人にありせば笠かさましを藁かさましを一つ松あはれ

岩室の田中の松をけふ見ればしぐれの雨に濡れつゝたてり

岩室の田中の松はまちぬらしわをまちぬらし田中の松は

いみじい温かみの充ち溢れた歌である。「岩室の田中に立てる一つ松の木」——かう云つただけで既にその表現のうち無限の情趣がある。私は岩室の村に入るや否や、何より先づ此の「一つ松」の所在をたづねないでは居られなかつた。折からとある店先に「岩室案内發賣所」と云ふ小さな看板の掲げてあるのが目にとまつたのであつて、それを買つて披いて見た。料理屋や湯宿や女の寫眞ばかりごとくと入れてある小形の美しい冊子の中にも、さすがに其の「一つ松」のことを忘れずに次の如く書いてあつた。

小丸山、一つ松

岩室より石瀬へ通ずる國道の南、田中の丘陵に立てる古老の松を云ふ（里人吉政の松と云ふ）源三位頼政の末子吉政の墓印なりと云ふ。

里人此附近にて古代の石鏡土器古鐘の破片及び石器時代の土人の遺物俗に矢の根石と稱するもの發掘せられたる例枚舉にいとまあらず之を以て見れば此の地方が幾千年の舊地なるかは推して知るべきのみ……云々
そしてその終りに良寛の歌をも添へてあつた。

そこで私はこの案内記の示すところに従つて、岩室の村を出外れると同時に眼を見張つてその方角を見廻した。そして山際の青田の中に古墳状をした小丘の上に、いかにもさびしげに立つてゐる一本の古松を見た。成程それは特別の注意を拂はないでも、此の道を通る者の眼にはおのづから映らずに居ないやうに見えた。

「成程あれだな」かう私は思はず叫んで、更に私の後から自轉車を走らせて來た高橋氏を振り返つて言つた。「あの松ですね、良寛さんの親友だつたのは」

「さうです、あれにちがひありませんね」高橋氏は笑ひながら答へた。

しかし、かうした二人の話を聞いてゐた車夫は、突然歩調をゆるめて云つた。

「あれも一つ松にはちがひありませんが、あれは近年さう云ふので、昔から云ひ傳へのある一つ松は、もつと先きの田圃中にあるがらんらうござつて」

そして彼は更に話をつとけた。

「案内記には寫眞まで出て居りますが、もう少し先きにある一つ松はとうの昔に枯れてしまつて、今あるのはその枯れた根元から生えた小さな若木だけでつて」

車夫がそんな話をしながら歩いてゐるうちに私達はいつの間にか樹木の茂つた村端を出はづれてひろくとした田の中へと出て居た。道はそのあたりですつと山際を離れて、見るかぎり平らな青田がつよいて居た。やがて車夫は立ち留つた。

「あれです」棍棒から離れた片手で南の方の田の中の一點を指しながら彼は云つた。「あそこに一寸小高いところがあるでせう、あの上に昔の人の一つ松と云つたのが立つて居つたがんです。それ、少しばかり枯れた片見、

が残つとりますでせう」

いかにも、そこには大きな木の枯れた跡の根株らしいものが突き出て見えた。そしてその傍にまだ二十年とたつたかたゝぬぐらゐの松の木が一本生えてゐた。しかし、私には謂ふところの本當の「一つ松」がそこに立つて居たのであるか、つい先刻見て来たそれであるか、判断のつけやうがなかつた。尤も良寛の歌の味はひを味はせる點では、今は枯れてないと云ふ其の松の在り場所が一層適切であるやうに思はれるのであつたが……。

だが、結局私にはそれはどちらでもよかつた。たゞその場合の私には——良寛が永い間孤獨な生活を營んでゐた國上山の麓からずつと續いてゐる此道、彼が托鉢の往き來に歩みなれた此道から見るとある地點、廣い田の中のとある地點に、一本の年古りた松がいつも淋しさうに立つて居た。そしてつひにはそれは彼の心に清く美しく根強い愛着を喚び起した——その事が以前よりも一層實感的に想像されさへすればそれでよかつたのである。やがて道は再び山際の森かけへと分け入つた。坂をのぼり下りのする度敷もしげくなつた。そのあたりはもう彌彦山の麓をなしてゐるのであつた。その山の端麗な姿が絶えず右手の空高く仰がれた。そしてそれへ近づいて行けば行くほど、ますます木立が神さびて見えるやうな氣がした。古風な建て方の人家が、道に沿うて散在してゐた。

彌彦村は岩室から一里の道のりであつた。越後の一の宮と稱せられた彌彦神社は、彌彦山の麓に密接して建てられてゐた。社殿は明治四十五年炎上後年ならずして起工して最近漸く再建の工を了へたばかりの新建築、社殿附近の古木老樹も多くは焼失して、昔ながらの幽靜神嚴な外觀を見ることの出来ないのは遺憾であつたが、それでも火災の及ばなかつたあたりはさすがに今なほ古木老樹の蔭が暗く神さびて見えた。

伊夜日子のおのれ神さび青雲のたなびく日すら小雨そぼふる

伊夜日子の神のふもとに今日らもか鹿の住むらむ皮のきぬ着て角つき乍ら

萬葉集時代にはかう歌はれて居たなど云ふことを知らないでも、此の山によつて日本海の風雪を遮り防がれ、暖かく且泰らかに東南へと開けてゐる此の附近一帯の地勢に注意を拂ふ者にとりては、此の附近一帯の地が如何に古くから人間の住むべく選ぶに適した土地であつたかと云ふ事、更にそこを選んで住んだ人々が此の恩恵深く、容姿の端麗な彌彦山を如何にありがたく貴いものに思つたかと云ふ事などは、おのづから想像する事が出来るのである。そして私はこゝにも自然と人間との關係の微妙な一面に觸れないでは居られなかつた。

「もゝ中のいやひこ山に、いや上りわが上れば、高ねにはやくもたな引、いはもには木立神さび、おちたきつ水おとさやけし、この水のたゆる時なく、其の山のいやとほ長く、ありかよひいつきまつまむいやひこの神。」

五十八日子の杉のかげ道ふみわけてわれ來にけらしそのかげ道を」

「五十八日子の麓の木立、神さびていく世經ぬらむ、威速振神さび立てり、山見れば山も手太し、里見れば里も豊けし、朝日のまきはしも、夕日のうらくはしも、そこをしも綾にともしみ、宮柱太敷立てし五十八日子の神。」

五十八日子の森かけ道ふみわけて我れ來にけらしそのかげ道を」

かうした良寛の歌のかずくを思ひ合せながら、私達はしばらくあちらこちらをさまよひ歩いてから、とある宿屋の樓上で午餐を喫し、一休みした後でそこを出て國上へと向つた。道はやはり山際に沿うた森かけに通じて

居た。坂が多いので思ふやうに道がはかどらなかつた。

その日私はそこから國上の國上寺までのぼり、良寛が永く住んで居た五合庵の跡と乙子湖畔の庵の跡をたづね、最後に國上村字渡部の阿部家をたづねて再び巻町へ引き返す豫定であつた。しかし、こゝまで来るのに既に一日の半ばを過ぎたところから考へると、到底それは實行の出来ない計畫であつた。彌彦の村を出はづれるとそこはもう國上村の地域であつた。そして彌彦村が彌彦山を背にして居る如く、國上村は國上山を背にして擴がつてゐた。けれどもその山への登り口まで行くにはなほ小一里の道のりがあり、更にそこから國上寺までは十町餘の山坂をのぼらなければならなかつた。随てそこへ登るとすれば、その日のうちに渡部の阿部家を訪ねることが出来ないばかりか、いくら急いでも巻町まで引返すことすら出来さうにもなかつた。と云つて、折角こゝまで来て良寛と最も縁故の深い五合庵跡をたづねないで歸ると云ふことは、何としても忍びないことであつた。私は全く當惑してしまつた。尤も行き暮れたところを何處でも自分の宿と定めて一夜を明かすほどの自由な心——良寛が持つて居たやうなさうして自由な心——さへ私にあつたなら、少くとも他の人々と明日の約束を取交してさへなかつたなら、私はその場合何等當惑する理由がなかつたのであらうけれど……

こんな事をひとりてよく思つてゐるうちに、車がもう國上村の一部である麓と云ふ部落を過ぎて、國上山の登り口近くへ来て居た事を、車夫の口から告げられた。

「どうしませう、これから直ぐに國上寺へお登りになりますか、それとも渡部の方へおいでになりますか」かう車夫は訊ねた。「渡部の村もすぐそこです、國上寺の登り口もちぎですか」

「さあ、どうでせうかね、私はかう答へるより外に仕方がなかつた。けれどもいつまでもそれではならないの

で、私は兎も角も一應高橋氏にはかることにした。

「さうですね」高橋氏も矢張私と同じく當惑を感じてゐるらしかつたが、すぐさう云つたあとから「どうです、渡部の方を先になすつては。國上寺の方は今日もしだめでしたら、又田なほして來ることにも好いわけですが、阿部さんの方は折角あてにして待つておいでせうから」と云つた。成程……と私も思つた。さう云ふ場合には私は結局對人關係の方を重んじなければならぬのであつた。しかし、その渡部の村も思つたよりはひどく遠かつた。おまけにそのあたりは信濃川の分水工事で散々荒らされてゐた。人間の力で今や驚くべく幅の廣い、底の深い河がそこに掘られつゝあつた。その昔酒類童子が住んで居たとまで傳へられた國上山、「高ねには鹿ぞ鳴くなる麓には紅葉散りしく」と良寛によつて歌はれた其の國上山の麓が、今やかくまでに變り果てゝ居ようとは、私には全く思ひもよらぬ事であつた。泥まみれになつた工夫の群、縦横に敷かれたレールの上を走るトロツコのとゞろき、蒸汽機關車から吐き出す眞黒な煤煙、掘りくづされた山の断面、所々に積り上げられた土砂、人々の叫び……私の心にはむしろ思ひがけない一種の不安さへ湧き起るのであつた。けれども又私はかうも思ひなほして見た——此の稀有な大工事がやがて成功して、こゝに今まで見る事の出来なかつた洋々たる大河が通じるやうになり、更に幾年の後掘りくづされた山々の断面までが草や木で蔽はれるやうになつたら、人々はむしろ以前にも増して此のあたりの自然の美しさを賞するやうになるのかも知れない。けれど……

私達はやがてその人工の河に架けられたあぶなさうな橋を渡つて渡部の部落へ入つた。しかし、私達の目ざして來た阿部家はその家込みから、更に三四丁も離れた小山と小山との谷合にあつた。私達は再び掘りくづされた小山の断面につけられた危ふげな道を辿つて行つた。そこと教へられた谷合には、人の脊丈よりも高いと思はれ

るほどの眞蕪が一面に生え茂つて居て、その中でヨシキリが頻りに鳴き交はしてゐた。阿部氏の家はひぐらしの頻りに鳴いてゐる奥深さうな森をうしろにして建てられた、新しい大きな家であつた。取次ぎの人に來意を告げると、やがて老主人桓次郎氏が出て來て迎へられた。

此の阿部家は良寛が五合庵時代に最もしげく訪れた家で、その當時の主人は定珍翁と云つて良寛とは最も意氣相投じた歌人であつた。しかし、良寛が訪ねた當時の阿部家はこゝではなかつた。

「もとの家は河の向ふ岸の山際にあつたのですが、分水工事の爲めに取りくづされて仕方なしに近年こんな所へ移つたのです」と老主人は笑ひながら話された。

阿部家所藏の良寛遺筆中の最も重要なものは、詩を書いた屏風二雙（一雙は草書、一雙は行書）掛物數幅、及びさまざまの文書を集めた巻物五卷等であつた。良寛の書を味はふには屏風と掛物が最も代表的なものであつたが、私にとりて就中最も興味の深かつたのは、五卷の文書であつた。その中には手あたり次第の紙片に書いて家人に示したらしい自作の歌稿及び詩稿が澤山あつた。五合庵、乙子湖畔の草庵、鳥崎村木村家邸内の假寓等の各所から阿部家へ寄せた手紙も澤山あつた。それから又阿部家滞留中主人定珍翁と寝ころびながら詠み合つたらしい應答の歌稿も澤山あつた。時にはさうして歌を詠みながらの對談中定珍翁と文法上の議論を交へた筆の跡も應答歌稿のところ／＼に挟まつて居た。さうしたさまざまの文書のいづれを見ても私には多大の興味を感じられたのであるが、わけてもそのやうな歌稿のところ／＼に同じ歌をこれでもう動かぬといふところまで幾様にも詠み變へてあるのが、限りないつかしみを故人の上と感じさせないでは措かなかつた。

このみやのみやのみさかゆみわたせばみゆきふりけりいつかしが上に

あまがみのみやのみさかゆいでたてばみゆきふりけりいつかしが上に

このみやのみやのみさかゆみわたせばみゆきふりけりいつかしが上に

このやうなのは中でも最も簡単なものゝ一つであるが、それにしても、此のやうに二度同じ歌を書いた間へ一寸ちがつた歌ひ方の歌一首を入れてあるのを見ても、一首の歌を自分のものとしてしつかりと握むまでの故人の心的経過の一端が窺ひ知られるのである。何事でも極めて自然に歌はれてゐるのは良寛の歌のすぐれた特色の一つであるが、しかも、その自然さは決してなげやりとか無法とか云つたことゝ同じ意味のものでない事が、かうした事實を見るに及んで、一層確實に知ることが出来るのである。更に驚くべき事は、矢張此の阿部家に藏せられてある文化二年刊行校異本の萬葉集の二十卷の、いづれの頁にも良寛自筆の細密な書き入れの存してゐることである。萬葉集に暗い私は良寛のその書き入れが何を根據として（千藤の略解に據つたものと思ふが）なされたものであるかを確め得なかつたけれども、兎に角それほどの苦心を費して良寛が萬葉集を讀んだと云ふことは、輕々しく看過することの出来ない事實であると思つた。傳ふるところによれば良寛は常に「自分の嫌ひなものは書家の書と料理人の料理と歌人の歌と詩人の詩である」と云つて居たと云ふことであるが、しかしかうした彼の態度も以上の如き半面の事實を外にしては其の眞意味の誤られ易いものであることが解つた。而してかくの如きはひとり彼の歌に於てばかりではなく、詩に於ても書に於てもおそらく同様であらうと思れる。就中書に於て彼は甚だしく所謂書家の書を嫌つて居たのは事實であるらしいが、しかも他面に於て彼は、生涯を通じて常に習字の努力を怠らなかつたと傳へられてゐる。書に於て彼の學んだのは主として懷素と道風とであつた。彼は他人から借り受けたそれらの手本を常に懷中して、在庵の時は勿論、托鉢の間と雖到るところでそれを習つた。し

かし彼の手習は世間の人のするそれとは餘程趣を異にしてゐた。彼は常に人に向つて「習字をするには絶えず手本の方がかり見てゐれば好い、自分の手元を見たり、自分の書く字を見ることは決してしてはならぬ」と教へたと傳へられてゐる。更に彼自身は常に手を以て空中に字を書くことを以て最上の習字法としてゐた。時には路傍の樹下に坐し、砂上に指を以て習字し、日の暮れるのも忘れてゐたことなどがあつたと云ふことである。

老主人の良寛談を聴いたり、文書中の重要なものを抜き書きしたり、又は同伴の高橋氏に頼んであれこれと寫眞に撮つて貰つたりして阿部氏邸に居ること三時間餘、時計の五時を打つたのに驚いてそこを辭した。しかし、如何にしてもそれから國上寺へのほり五合庵趾を訪ねると云ふやうな時間はなかつた。國上寺へ行つても良寛の筆蹟は屏風の外見るべきものがなく、五合庵も良寛在住當時のそれは夙に昔に朽ちこぼたれてしまつて、近年その跡に新らしく建てられた小庵があるに過ぎないのであつたが、それでも故人が最も好んで最も永く住んだ庵の跡であるだけにそこを訪ねずに歸ることが、たまたまなく残り惜しい氣がした。しかし、何と云つても今の場合仕方がないので、せめては國上山の寫眞だけでも撮つて歸りたいと思つて、そのことを高橋氏に謀つた。高橋氏もそれには同意した。そこで私達二人は阿部家の門を出ると同時に、殺風景な掘割工事を越えて向うに高く聳えてゐる國上山の全景を最もよく寫し撮ることの出来る地點を探しにかゝつた。ところが、私達のさうした様子を門内から見送つてゐられた阿部翁は、慌てゝ私達のところへやつて来て「國上山を寫すのならば、こんな平地ではいけない、あそここの山がいゝ」と云つて、門前から一丁離れたところに突立つてゐる大きな樹木の茂つた小山を指さした。そしてこちらの返事も待たずに「私についていらつしやい」とばかりに先に立つてドシ／＼歩き出されるので、私達もかなり疲れて居たし、氣がせいでも居たのであるが、仕方なしに老主人の後について、その

急勾配の小山を息をあへぎあへぎ登つて行つた。山をのぼり切ると、そこに菅原社と云ふ額のかゝげられたかなり立派な社があつた。先にたつた阿部翁は社の石段を登りながら私達の方を振り返つて云はれた。

「これが渡部の村の鎮守で、良寛さまが『此の宮のみやのみさかゆ……』と歌はれた、その宮のみ坂が即ちこれです。尤も『み雪ふりけりいつかしが上に』の『いつかし』は坂のずつと下にあつた老木でしたが、餘程前に枯れてしまつて今は影も形もありません」

いよ／＼皆が社の境内の平らなところまで登り切ると、阿部翁は更に國上山の方を指さしながら「どうです、こゝからどこもかも見えるでせう。それあの山の中腹に白く光つて見えるのが、あれが國上寺の阿彌陀堂で、その少し下に五合庵があるのです」といかにも得意げに語られた。

高橋氏は早速寫眞機を握るつけにかゝつた。阿部翁はその傍でいろ／＼と指圖をされた。私はたゞ一人離れた地點にたつて、刻一刻黄昏の色の濃くなりつゝある國上山の山を眺めながら、矢張りかうした淋しい黄昏時に唯一人とぼ／＼とあの山の草庵へ歸り行くのを常としたであらうと思はれる良寛その人の姿を想像した。そして次の如き良寛その人の歌も思ひ出された。

「たそがれに國上の山を越えくれば、高ねには鹿ぞ鳴くなる、麓には紅葉散りしく、鹿のごと音にとそ鳴かね、紅葉のいやしく／＼ものぞ悲しき。

夕ぐれに國上の山をこえ来れば衣手さむし木の葉散りつゝ」

やがてその山を降りた私達は、阿部翁に別れを告げると同時に、出来るだけの速さで再び國上から彌彦へ通ずる山もとの道を急いだ。到るところの森で蝸がしきりに啼き交して居た。平野のあちらこちらから群れ飛んで來

る數百とない鳥が、いづれも國上山の麓の森へと時を求めて行つた。

長崎の森のからすの啼かぬ日はあれども袖のぬれぬ日ぞなき

と良寛の歌つたその長崎の森ちかあたりでは、わけてもその啼き騒ぐ聲が著しいやうな氣がした。彌彦の村から一里近い手前の麓と云ふ村の邊で日が全く暮れた。始めは云ひやうのない快かつた夕ぐれの涼しさも暗くなるにつれてやるせない淋しさを誘ふやうに感じられた。

あまつたふ日は傾きぬ良寛がいほりの跡も遠からなくに

良寛がいほりのあとの國上山その麓にて日は暮れにけり

故人をおもふ想ひと、旅の哀愁とがもつれ合つて、私の心は稀有な感情の濕ひのうちにあつた。

彌彦の村を通つたのは夜の九時で、巻町の宿へ歸りついたのは十一時であつた。折わるく暗夜だつたので、かの岩室の一つ松を再び見ることが出来なかつた。

七月十四日

早朝宿の主人が良寛の筆蹟二點を持つて来て見せてくれた。一つは濱浦村大久保氏の所藏の巻物で、それには次の如き一首が書いてあつた。

「あしびきの久彌美のやまのやまもとにいほりをしつゝをちこちのさとにいゆきていひをこひひとひふたひとすこせしにあまたのとしのつもり来て身にいたつきのおきぬればたちるもよこゝろにそはずうつしみのしりにし人もみぢ葉のすぎでゆければいまさらにはありともありぎぬのありがひなしともひしよりいひも

こはずとちこもり久彌美のやまのやまもとにみまかりにけりあさつゆのごとやゆふきりのごとや。」

今一つは巻町某氏所藏の掛物で、それには次の如き三首の短歌が書いてあつた。

やちまたにもなおもひそみだぶつものちかひのあるをしらべに

われながらうれしくもあるかみだぶつのみすみににゆくとおもへば

くさのいほにねてもさめてもまうすことなむあみだぶつなむなみだぶつ

たゞ前掲濱浦氏所藏の長歌のうちで、作者みづからの身の上を歌つたものとしては、「みまかりにけり」の句が穩やかでないやうに思はれると云つた人もあつたが、かうした例は他にも幾つかあるので、私はなほよく考へて見ることにした。

午前九時三十八分發の汽車で、私はかねて約束のある國上村字牧ヶ花解良尊二部氏を訪ふべく松木氏と共に宿を出た。汽車は粟生津驛で降りるのが道順なので、私達は幸ひその粟生津村の鈴木家を訪ね、そこに傳へられてゐる良寛に關係ある文書を見せて貰ふと共に、同家の先々代鈴木文臺先生の遺跡を弔ふたり遺品を見せてもらつたりしようと云ふことに決した。しかし、私達は二人とも此の土地には全く不案内なので、さまざまに考慮をめぐらした結果、先づその村の小學校を訪ねて、そこで何とか案内を頼むことにしたところが、その校長は案内にも深切に私達を遇してくれて、午飯までも馳走してくれた上に、わざ／＼自分で私達を鈴木家へ連れて行つて紹介してくれた。鈴木家の當主（文臺翁の孫）は時之助氏と云つて、早稻田の文科の第一回卒業の人であつた。見るからに温厚篤實の人で、いかにも故人文臺翁の後を繼ぐべき君子人のやうに思はれた。文臺翁徳化の中心であつた學塾の跡は今も鈴木家の菜園となつてゐるが、その徳化は今日なほ著しく郷土民俗の上に見ることが出来

ると云ふことは、誠に貴い事實である。西郡氏の『良寛全傳』の中に左の如き逸話が録されてゐる。

「文化十年の交、太田芝山來越し、帷を西蒲原牧ヶ花に垂れ、弟子進む、文臺年十八、之れに師事し又講筵を助く、禪師（良寛）時に年五十七、亦座に在り、歎稱して曰く、斯の兒、異日必大器を成すべしと、鑑識卜龜の如し。」

更に同書に良寛と文臺との交遊について左の如き逸話が載せてある。

「禪師論語を愛讀し、疑義を鈴木文臺翁に質す、翁曰く、其事は某註に出づ師未だ讀まざるかと、師曰く、野衲註を讀むを欲せず、之を讀まば却て疑を増さん事を恐ると、師の六經を以つて直に註脚となすの概想見すべし。」

「文臺翁に書翰を送りて來庵を促しければ、翁は折角の案内なればとて風雪を肩して訪問したりけるに、師曰く、衲は他家の御齋に行く可ければとて、飄然庵を出で去れり、翁徒然に堪へず、室内を掃除し机案を拂拭しなどして待てど暮せど師は歸來せず、日晡に及びたりければ、翁は崑岡手を空しくして歸家せりとぞ。」

「これも文臺翁師を庵室に訪問したる時の事なりけり、師は晝飯を供せんとせしも椀、箸なし、師去りて火葬場に至り、野飯を盛りたる破椀を拾ひ來りて飯汁を供せり、流石の翁も之れには辟易したれども、師は平然たり、蓋淨穢不二、眞妄一途の意なり、而して五合庵訪問の奇客は概ね此御馳走に合はざるものなかりしとぞ。」

以上では良寛と文臺との交遊の如何なるものであつたかの輪廓が窺ひ知り得るのであるが、私は更に何等か良寛その人の文書の鈴木家に傳はつて居るものがないかをたづねて見たが、不思議なことにはそれは一つもなかつた。たゞ鈴木家の本家即ち、同村鈴木宗久氏の藏してゐられる文書一卷を借り受けて置いたからと云つて、それを見せてくれた。この一卷中に收められた文書は多く文臺翁の兄君鈴木桐軒翁に寄せられたもので、それは

既に西郡氏の『全傳』中に採録されたものであつた。その一卷を繰り返し讀誦したあとで、私は更に文臺翁の良寛觀で、既に西郡氏その他の人々の著作中に紹介せられたもの以外に何か傳はるものがないかをたづねたところ、幸ひにもその後時之助氏の手によつて蒐集せられた文臺翁書翰中に、村上藩の三宅相馬と云ふ人から良寛の如何なる人なるかをたづねられたのに對する故翁の長い返書が一通あつた。私はたまらない嬉しさをおぼえながら、早速その全文を寫させてもらった。

「……（前文略）……御示しに任せ拙文呈上供爛曬候、乍去寛師の書と一聯になし被下候ては實以て恥入候間御軸の背面になりとも御取合せ被下度此段御斟酌に預り度候、寛師和歌遺稿二卷江戸國雄の義子慶雄（林姓）と申すもの取しらべ上梓致候ひきと先年より其他しも有之候、詩稿一卷長短篇取合せて二百餘も有之候、其外逸篇も餘ほど有之様子に候、其内小生記憶に存し候もの二十ばかりも御座候

陽春二月時、桃李花參差、高者覆館閣、卑者當庭幃、色奪朝日艶、

香入暮雲飛、駐輦公子醉、連袂佳人之、一夕狂風變、滿城爲雪飛。

生涯懶立身、騰々任天真、囊中三升米、爐邊一束薪、誰問迷悟跡、

何知名利塵、夜雨草庵裏、雙脚等閒伸。

袖裏毯子直千金、謾言好手無等匹、箇中得意若相問、一二三四五六七。

右等の詩にて粗々其平生も相知れ候、橘氏（良寛の家）は舊族にて昔年大納言某佐州左遷の節風待はと彼家に旅寓有之、船出之砌り、主人と送別彼卿の留別何とも情深く哀れに覺え候、只今思出不申候故不申候、寛師幼名源藏父を以南と申し俳諧歌に譽有之候、家世々出雲崎の亭長に御座候、寛師も一旦家督相續致し候處驛中にて死刑の盜賊有之候節出役、其日歸宅の後直に出家致され候由申傳へ候、師の弟名香、澹齋と號し申候、此人京都菅原博士の塾長相務め……澹齋の弟新左衛門と稱し先職を繼ぎ罷在候、此人豪奢不羈にて斥逐を蒙り、名を由之と改め、和歌を以て數年奥州遊歴致され、歸郷の後小生も折々相見申候、實に磊落豪邁の人に御座候、讀歌は勿論伊勢源氏に精敷、二語の註釋草稿只今家藏のよし、「海月の骨」と申す假名遣の小冊子は、木之候由、由之子馬之助と申し善書の名有之、是も奥州の方遊歴致し、中年物故、それ故知る人も御座なく候、馬之助の子泰人と申し歌道心に懸不淺、當主人に御座候、右之兩人は小生一面も無之候、寛師の縁より不
思無用の事書きつらね候……（以下略）……

霜月二十六日

鈴木文臺

三宅相馬様

寫し終つて私は此の書翰中良寛の弟由之に關する記述のうちに、私が今まで暗中摸索してゐた問題解決のヒントのいみじくも與へられてゐるのを、わけてうれしく思つた。それは『大愚良寛』中にも書いて置いた事で、即ち良寛が何故に歸國後に於て、自分の出生地であり且生家の依然として存してゐる出雲崎の地を遠ざかり勝ちであつたかと云ふことについての疑問である。而も今や此の文臺翁の手翰によつて始めて弟由之の人となりの輪廓を知り、且「斥逐を蒙り」の四字を見るに及んで、私には此の重大な疑問に對する一道の光明が俄然として天の

一角から落ち來るが如く覺えたのであつた。而して此の時私の頭に浮んだ考へは、此のヒントを據りどころとしての出雲崎方面の取りしらべと云ふ一事であつた。

やがて私達は鈴木家を辭して、文臺翁の墓に詣でた。そしてそれから直に前約のある牧ヶ花の解良家へ向はうとしたのであつたが、粟生津校々長の勧めによつて同村々長和田氏の邸を訪ね、同家に愛蔵されてゐる良寛遺墨を見せて貰ふことにした。和田氏も矢張り早稲田の政治科出身で、且柱湖村氏の令兄だと云ふことであつた。和田家所藏の良寛遺墨は「孤拙兼疎慵……」の詩を書いた横掛一幅と、「いやひこの杉のかげみち……」の歌を書いた扇面と、それから「誰が昔こなべ洗ひしすみれ草」「あげ巻の昔をしのぶすみれ草」の二句を認めた短冊二葉とであつた。

和田家に居ること一時間餘、私達はいよく牧ヶ花の解良家へと向つた。牧ヶ花は此の粟生津から一里未滿の道のりしかなかつた。青田の中を通じた平らな一本道を辿りながら、私達はこの道も矢張りその昔良寛の通ひなれた道だらうかなどと話し合つたりした。

牧ヶ花は西蒲原郡國上村のうちで、そこに解良氏と云ふ舊家がある。遠い昔からの此の土地の豪族で且郷土であつた。此の家は良寛の庵を結んで居た國上山からは約一里の道のりであつた。どう云ふ因縁からか、良寛はその家の第十代喜惣左衛門（後に新八郎と改む號叔問）榮綿（寶曆十三年生文化二年歿）と親しい交りがあつた。そして繁く此家に入出した。今日良寛の逸話や筆蹟の傳はつてゐる點では、おそらく此の家の右に出づる家は一二以上にはなからう。……かう云ふ事は西郡氏の『良寛全傳』や、人々の話によつて、私はずつと前から知つてゐた。隨て今回の私の旅行に於ても、此の解良家を訪ねることが最も重要な日程の一つであつた。幸ひ藤井界雄

師からの紹介もあり、且最もうれい事には解良家の當主淳二郎氏とは松木氏が同窓の友であると云ふ事で、私
が困難な事の一つに數へて居た解良家訪問は、寧ろ最も容易に取運ぶことが出来た。

解良氏の邸は川に沿うて構へられてゐた。古風な門を入ると、右手に大きな土蔵があり、正面の前庭は詩趣に
富んだ細竹が植ゑ込まれてゐた。そこを右に廻つて入ると、萱葺のいかにも古風な、驚くべき大きな本館があつ
た。玄關には注連縄が張られてあつた。案内を乞ふと、袴をはき衣紋を正した白髪長髯の老執事が二人出迎へ
た。主人はまだ四十を幾つも出て居られないと思はれる若い、はきくした、氣持の好い紳士であつたが、家風
の萬事は現代稀に見る古風を以て充たされてゐた。しかもそれは現代的な貴族風とは全然趣を異にし、味はひを
異にした、いかにも氣持の好い空氣を漂はせてゐた。

解良氏との會談を始めて間もなく私達は私達の今居る此の家が、良寛その人の訪ねた當時のまゝの家である事
を知つた。晝家嵐溪の苦心を重ねて築いたと云はれる庭のたゞずまひも、私達に云ひやうのない、しつとりとした
氣分を與へた。

同行の松木稻葉の二氏が共に解良家の當主と同窓の友であると云ふ縁故から、私までもつひに其の日をそこに
一泊させて貰つてゆる／＼良寛研究に關する資料を調べさせて貰ふことになつた。解良、松木、稻葉三氏と、そ
れから後で招きに應じて來られた三島郡長の片山三男三氏とが、相共に學窓時代の昔に歸つて打解けた會話に興
じて居られる間に、私は貸し與へられた良寛の文書をたゞ獨りしみるゝとした心で閱覽した。解良家の所蔵にか
かる良寛の筆蹟は、掛物四幅、横卷二卷、額一面であつた。

四幅の掛物のうちで最も私の注意を惹いたのは短冊三葉を仕立てたそれであつた。

歌は

ますらをのふみけむ世々のふるみちはあれにけるかもゆくひとなしに
しらつゆにみだれてさけるをみなへしつみておくらむそのひとなしに

あきもやよさむになりぬわがかどにつれさせてふむしのこととする

と云ふ三首で、これは既に歌集中にも收められてゐる歌であつたが、驚くべきは其の短冊の書き方が全然蕪蕪
を無視して、しかも其の字と云ひ位置と云ひ此の人を外にしては見ることに出来ない自由な、そして見事な快
ものであることであつた。短冊に書かれた良寛の歌は極めて少ない上に、これほど氣持よく書かれたものは殆ん
ど他に見ることが出来ない、と云つても過賞でない、私は思つた。

次は額一面、これは良寛尊崇者の間に廣く知られた所謂名物の一つで、大きな古鍋蓋の裏に「心月輪」の三字
を刻したもので、「良寛書」の三字も鮮やかに讀むことが出来た。書は云ふまでもなく良寛の特色を最もよく現
したものであるが、私はそれよりも何故このやうな汚ならしい古鍋蓋を特に選んで額にしたかと云ふ事に興味を
持つた。しかし、その事については何事もつひに知る事が出来なかつた。

さてその次に横卷二卷、これは解良家へ宛てた良寛の手紙、その折々に書き散らした詩歌の詠草、その他語
戒、文法摘要等を集めたものであるが、私にとりては此の方が一番うれしく、なつかしく、貴く思はれた。私は
そのうちに人としての良寛が、到處に活現してゐるのを見ないわけには行かなかつた。此の二卷の横卷には左の
如き鈴木文豪翁の題文が添へられてあつた。

上人必可傳者有三、面道德不與焉、曰詩、曰和歌、曰書、凡人有能得上人之一者、則皆足以不朽乎後世矣、

況兼有者乎、而上人之於三者、土苴視之、非有意於求特之傳而不朽也、是慙可貴也、如唐僧靈一處默叢、以詩傳焉、如懷素高閑輩、以書傳焉、而未聞彼此易其可傳者、而又可傳否也、殊方界絕、無論不通皇國之和歌、又不知其道徳比吾上人若何也、古者皇國之高僧達和歌者、妙書者、巧詩者、亦不少矣、雖然、皆長于彼、短于此、又未有兼通並能者也、然則人得上人一紙半幅者、豈可不珍襲乎、頃解良子直、出籠中所收上人詩歌俗牘數十紙、裝爲三横卷、以示余、余披而見之、詩則草率所爲、似未脫稿者、俗牘則答子直之先大人叔問君者十而居九、大抵謝惠米糒菜菓等物也、余於是慨然嘆曰、叔問君能知可與之人以與之、與之而不傷惠、上人能得可受之人以受之、受之不傷廉、其與其受、一出乎道義之交、故人之知叔問君者、可以知上人、而知上人者亦可以知叔問君、余不肖亦嘗辱二公之眷遇久矣、今見此卷不能默止、是以書卷端

弘化四年丁未八月

此の横卷中に收められた主要な本文は、多くは西郡氏の『良寛全傳』中に再録されてゐるから、こゝには一々擧げない事にするが、此等の横卷を精讀して、第一に私の心にとまつた事は、前掲文臺翁の題文中にもあるが如き解良叔問翁の良寛に對する交情についてであつた。

青陽の御慶何方も目出度申納候然れば舊多はもち、やうかん共御受納仕候尙永日の時を期候敬白

正月四日

叔問老

良寛

今日はこんぶ、たはし、たしかに相とゞき候先日は菊のみそづけたまはり珍味仕候且又貧人に餅多くたまはり大慶に奉存候暖氣催候は、參上仕度候敬白

正月廿日

解良叔問老

良寛

寒氣如何御暮被遊候や住庵無事罷過候米、もち、茶、煙草、菜等いろ／＼被下忝受納仕候さて歳暮贈物は今日受取候間別に遣はさるゝ事御無用になし可被下候……(後略)……

十一月廿日

解良叔問老

良寛

先日は御手紙辱披見仕候如仰歳暮御取込信に入察、其節ナンバン、ナスビ過し頃はミソママ辱奉存候野僧は此多は暖にて食物も春までたくはい有之安穩に過候間御あんじ下さるまじく候以上

十一月廿六日

先日は寛々御目に懸喜悅仕候さて歸庵後、病氣もだん／＼平穩托鉢にも兩三度出候へば米も一斗あまり有之候

先頃は歳暮の御贈物受納仕候煙草も落手仕候殊にみそ豆黍奉存候野僧此頃は寒氣にてせんき起候處かせいも
夜に焼いてたべ快氣仕候猶期永春之時敬白

臘月廿六日

寒氣の節御清和御渡被遊候哉野僧無事に罷過し候いつぞやおき候米つかはされ可被下候かやは寶珠院へあつ
らひおき候間ぬす人のきづかひ無之候此度御返さい不仕

十一月十八日

○
〔此の文中「いつぞやおき候米」とあるは、托鉢して集めた米を一旦解良家へ預けてども置いたものらしく
思はれる。蚊帳を借りて使用して居た事も面白い事實である。——著者記〕

かう云つたやうな手紙は以上の外にもなほ幾通もあつたが、それらを通して知る得る解良翁の良寛に對する交
情がいかに懐しくゆかしく思はれると同時に、良寛その人の日常生活の實況も仄見える心地がした。これらの
手紙のあちこちと讀み味はひながら、私はふと其日粟生津の鈴木家所藏の文書中に見た左の如き良寛手記の紙片
を思ひ出した。

第一受用具

頭巾、手拭、扇子、鏡、手毯、ハヂキ。

第二隨身具

笠、脚絆、カフカケ、上手巾、杖、掛絡。

第三行履物

著物、桐脚、鉢、囊。

右出立の砌、可讀之、於不然至不自由也

これは一日禪師が鈴木隆造翁宅に來遊し午睡して居られた間に隆造翁が私かに其の頭陀を誂いて見たところか
う云ふ事を書いた紙片があつたので、それをこつそり取つて置いてそのまま祕藏して置いたものと云ふことで
あるが、人間の簡易生活もこゝまで徹底すると一種の崇嚴味の加はることを思はずには居られなかつた。

次に今一つ解良家所藏の良寛文書を読んで興味深く思つた事は、左の如き一通の手紙についてであつた。

是はあたりの人に候夫は他國へ穴ほりに行しが如何致候やら多はかへらず、こどもを多くもち候へ共まだ
十よりしたなり此春は村々を乞食してその日を送り候何をか興へて渡世の助にもいたさせんともおもへども
貧窮の僧なればいたしかたもなしになりと少々此者に御あたへ可被下候

正月四日

これは云ふまでもなく一種の紹介状であるが、諸所に保存されてある良寛の甚だ數多い手紙のうちで、他人に
他人を紹介した手紙は殆ど見當らない程であるにも拘らず、こゝにかくの如く堂々とした一通の貧人紹介状の存
することは、何とも云ひやうのないうれしい事に思はれた。しかも此の一通の手紙がとりわけ書も立派に、字の
配列も行儀よく書かれて居たことは、一層私には喜ばしかつた。

更に今一つ私の注意を惹いた事は、

「先日草庵へ御來臨の處其日より又風を引きかへし候一兩日以来人に被成候書寫致し候法華經指上候病中ゆゑ

筆力無之御免被下候紙は使盡候筆は御返申上候」

と云ふ手紙のうちにある「法華經の書寫」と云ふ事であつた。良寛書寫の法華經——それこそ見ものだと思つたからである。そこで私は此の事について解良氏に訊ね、もし其法華經が今日なほ保存されて居るものならば是非見せて貰ひたいと頼んだ。けれども其の法華經は到底見ることの出来ないものであつた。と云ふのはその法華經は文化十四年三月に解良叔問翁が、自邸の古屋敷に地藏尊一體を建て、その下に埋める爲めに良寛の筆を煩はしたものであるであつた。かう云ふ話をしながら、解良氏はにこ／＼しながら言葉をついで、

「一寸考へるとまつたく惜しいやうな氣がします。そんな事をして置くのは勿體ないから掘り出したらどうだなど」と云ふ人もありますよ。しかし、そんな事の出来る性質のものではありませんからな」

こんな事を云つた。

「まつたく惜しいやうに思はれますね」

「だが、掘り出して見たところで、もう朽ちてしまつてゐるでせう」

こんな話が一しきり私達の間に取り交はされたりした。

その夜はそれだけで寝に就いたが、翌朝更に解良氏は良寛が手習ひするのに解良家から借用するのを常として居たと云ふ懷素の自叙帖一卷を出して来て見せてくれた。その懷素の書を見てゐるうちに私は前日見た文書中に良寛が解良家に置き忘れた道風の石刷の處置を頼んだ手紙のあつたことを思ひ出した。そしてそのことを解良氏に話すと、解良氏は良寛の手習ひしたといふ秋萩帖もやはり自分の家から借りて居たものらしいと云ふ事を話された。

こんな事を話し合つてゐた間に、解良氏は何か急に思ひついた事があるらしく、座を立たれたが、やがて半紙二つ折の縦綴の帳面のいかにも古ぼけたのを二冊持つて来て示された。先づ手に取つた一冊は表紙に『今日茶雜記』と書いてあつた。

「それは三郎兵衛といふ祖父さんの覚え書きです」

と解良氏は註を入られた。そして表紙をめくつて私が讀み始めると、解良氏は更に、

「いや、その帳面の方には御参考になることは何もありません、たゞおしまひの方に一寸良寛さんの花盗みの事が書いてあるだけです」

かう云つて、手づからその個所を出して示された。見るとそこにはこんな事が書かれてあつた。

上人一日山田の驛某が菊の花を折る、主人見とめて花盗人入りしとし其圖を繪に畫きて是に贅をせばゆるさんと云ふ、上人筆をとりて、

良寛僧がけさのあさげ花もてにぐるおんすがた後の世まで残らむ

私は早速それを寫し取つた。それを見てとつた解良氏は手早く他の一冊を示して「これこそ今迄あまり人に見せなかつたものですが此上ない参考資料のやうに思はれます」と云ひながら私の手に渡された。見るとその表紙には小さく『良寛禪師奇話』と朱で書いてあつた。私の胸は突然の歡びに躍らざるを得なかつた。私は微かに手のふるへるのを覺えながらその表紙をめくつた。第一頁の初頭には『今日茶雜記——弘化二年』と題されてゐた。それはかの叔問翁の子三郎兵衛榮重翁（文化七年生安政六年歿）の手記になつたものであつた。

その所謂『良寛禪師奇話』の一行々々が如何に私の心を躍らせたかは、到底私自身には言ひ現はすことが出来

ない。「このやうなものが私の前に現はれて来ようとは、全く思ひがけなかつた、これは一體どうしたことだらう」そんな風な思ひまでが、繰り返し／＼私の胸をくすぐるやうな気がした。それは半紙の罫紙十四五枚ばかり費して、良寛の行状について見聞したことや、又は筆者自身の印象を書きつらねたものであつた。良寛の行状について口碑以外にはいくらかも知ることが出来ない——かうした事が研究者間の殆んど定説となつて居る今日、このやうな立派な記録があらうとは、まづたく思ひかけない事であつた。私は殆んど夢中になつてそれを耽讀した。そしてある瞬間には聲をあげて笑つた。ある瞬間には襟を正して肅然となつた。又或る瞬間には膝を叩いて感じ入つた。かうして三回たてつゞけに讀み通してから、私は例によつて寫しにかゝつた。けれどもその時解良氏は云はれた。

「それをお寫しになるのは大變でせうから、後から誰かにうつさせて早速お送りします」

私はかうした家實を見せて貰つたことだけに對しても感謝すべき言葉を知らない程に思つてゐたのであるから、更にかうしたことまで甘んじて依頼することは、到底忍びないことのやうに思はれた。しかし、折角の先方の厚意でもあるし、それにさうまでゆる／＼しても居られない事情もあつたので、心苦しく思ひながらもそのやうに依頼することにした。が、せめてはその中で最も深く私に感動を興へた箇所だけでも、自分の手で寫し取つて置きたいと思つて、左の如き三四の逸話だけをノートに書き取つた。

師常に黙々として動作閑雅にして餘有るが如し、心廣ければ體ゆたかなりとはこの言ならむ。

師常に酒を好む、しかりと云ども重を超て醉狂に至るを見ず、又田父野翁を問はず錢を出し合ひして酒を買

呑む事を好む、汝一盃吾一盃、其盃の數多少なからしむ。

師平生喜怒の色を見ず、疾言するをきかず、其飲食起居舒ろにして愚なるが如く、隨身の具笠などには「おれがの、ほにおれがの」と書して在り、余が家に師の持たれし夢遊集あり、「ほんにおれがの」とあり。

師嫌ふところは書家の書、歌よみの歌、又題を出して歌よみをする事。

余問ふ歌を學ぶ何の書をよむべしや、師曰萬葉をよむべし、余曰く萬葉我輩不可解、師曰くわかるので事足れり、時に曰く古今はまだよい、古今以後不堪讀。

盜あり國上の草莽に入る。物の盜み去るべきなし、師の臥褥をひきて密に奪はんとす、師寢て不知ものゝ如くし、自ら身を轉じ其のひくにまかせて盜み去らしむ。

醫師正直と云ふものあり、師に問て曰く吾金を欲す如何せば金を得んと、師曰く業を勤めて人の手元を見る事なかれと。

師余が家に借宿日を重ぬ、上下自ら和睦し和氣家に充ち、師去ると云ども數日の内人自ら和す、師と語ること一たびすれば胸襟清きを覺ゆ、師更に内外の經文を説き善を勸むるにもあらず、或は厨下につきて火を燒き、或は正堂に坐禪す、其話詩文にわたらず道義に不及、優遊として名狀すべき事なし、只道義の人を化するのみ。

坡丈と云ふもの有、俳諧歌者なり、自ら拙書を數ず、師是を聞て曰く新編に心を勞することなかれ書自ら成らむと、坡丈是より字を書くに易しと、其徒若水語る。

井上桐庵師を尊信して常に國上の草莽を訪ふ、當時の善人を師に問ふ、師余が父を救へらる、爾後余が家に

往來す。

やがて高橋氏に頼んであれこれと寫眞に撮つて貰つたり、解良家珍藏のさまざまの古書畫を見せて貰つたりしてから、私達一行は打ち揃つて解良家を辭した。私の胸には言ひ現はしがたい感激がみち／＼して居た。昨日來た道を歩いて粟生津の停車場へと戻るのであつたが、私にはそれはまるで異つた風趣の豊かな道のやうな氣がしたのであつた。(備忘の爲めにこゝに一つ附記して置かねばならぬ事がある。それは解良家の珍藏の中に橋守部の短冊の甚だ多くあつた事である。そしてその事についての解良氏の談によるとそれは前に掲げた『良寛師奇話』の筆者三郎兵衛翁が守部の門人であつたからだとの事であつた。参考とすべき事である。) 粟生津の停車場で私と稻葉氏とは三島郡小島谷行きの切符を買つた。松木氏も片山氏も同じ汽車に乗つたが、行く先はちがつて居た。高橋氏は一人反對の方向へ歸るのであつた。汽車の窓からは依然として彌彦國上角田の三山が眺められた。私達の間の話題は依然として良寛に關することが大部分を占めて居た。

私と稻葉氏との下車すべき小島谷驛は粟生津驛からは四つ目であつた。道のりはおそらく四里とはあるまいと思はれた。小島谷の停車場で下車した私は、これまでよりは一層しんみりした氣持で、稻葉氏に導かれるまゝに田畝中のかなり廣い平らな道を、西北と思はれる方角へ向つて歩いた。

「あすこに見えるのが鳥崎村ですから、ゆつくり歩いて行つても三十分とはかゝりませんよ」と稻葉氏は道のとつゞきに見える樹木の多い村を指さしながら云つた。

私達はこれから其の鳥崎村へ行かうとしてゐるのであつた。鳥崎村——こゝは實に良寛が彼の光輝ある長い生涯の最後の數年を送つた所、而して彼の遺骸が弟由之のそれと共に永遠の棲處を興へられた地なのである。

「さうでせうね」私は稻葉氏の注意に對して辛うじてこれだけの簡単な返答をしかなし得なかつたけれども、私の心裡には語るべくあまりに多くの感想が去來しつゝあつたのである。

國上山村附近と此のあたりとは、今日では郡の區劃がついてゐるけれども、一面の平野つゞきであるから、交通も昔から左程不便ではなかつたにちがひない。しかも、彼の故郷出雲崎へもこゝからはさう遠くはないのであるから、良寛が此處に最後の棲家を求めたのも、必ずしも單に木村氏と云ふ外護者があつたばかりではなかつたらう。そんな事も思はれた。

「あすこに板葺の屋根の高く突出て居る新らしい寺が見えますね」稻葉氏は突然行く手の村の一角を指しながら云つた。「あれがたしかに良寛さんのお墓のある隆泉寺でせう、近頃改築したと云ふことですから」

「随分大きな寺ですね」かう答へながら私は稻葉氏によつて指さされた新らしい大きな板葺屋根を眺めた。降り注ぐ眞夏の日光に屋根は光つてゐた。

大きな樹木の青葉が四方からそれを包まうとしてゐるやうにも見えた。

「たしかあの寺は淨土眞宗でしたね」私はさう大して深い意味もなくそんな事をたづねた。

「さうです」と稻葉氏は答へて、「して見ると良寛さんは宗旨ちがひの寺に葬られてゐる譯ですね」かういかに大きな發見でもした如く言ひ足した。

「しかし、そんな宗旨なんてことは良寛さんの眼中にはなかつたでせうよ」と私は答へた。「それもさうですね」と稻葉氏は明らかに私の言葉の意味を理解したらしく應じた。

やがて私達は村に入つた。村の入口に幅の十間以上もあらうと思はれる水の濁つた川が流れてゐた。川の中に

は眞黒く日に焼けた子供が五六人水を浴びてゐた。三四人の子守娘が川端に立つてそれを見て居た。稻葉氏は早速その子守娘を捉へて訊ねた。

「お前達木村さんの家はどこだか知らんか」

「のとやさんのことかね」かう一人の娘は云つた。

「さうだ」と稻葉氏は答へた。

「そんならその橋を渡つて少し行つてから右側に大きな門のある家だ」と子守娘は橋を指しながら云つた。

私達は子守娘に教へられたまゝ橋を渡つて行くと、成程おきに木村家の門を右側に見出した。かねて書物の上で知つてゐた通り、門前には

『良寛禪師遷化之地』

と刻した大きな碑が建てゝあつて、この碑を蔽ふやうにして枝ぶりの面白いかなり大きな松の木が一本立つてゐた。碑陰には次の如き文が刻まれてあつた。

良寛禪師爲北越禪林古宿、三島郡島崎村有木村元右衛門君者、爲人謹厚勤勉、篤奉吾眞宗之教、師甚愛之、親如父子、嘗謂人曰、木村氏之居余涅槃場也、君夙諒其意、以別墅充師禪堂、師游化无方、倦則來歸、閉戸入定、殆忘寢食、天保二年正月六日遂寂于茲、享年七十三、今茲辛亥正當其八十四忌、木村氏之彦周作君、爲建紀念碑于邸内、請循誘僧正題字、使余記其由于碑陰、余會聞師德高行修、而未詳其傳、乃據友人藤井界雄所記、敘之如右。

明治四十四年七月

圓通道人釋連城撰並書

小林群鳳刻

門を入つて案内を乞ふと、やがて當主周作氏みづから出でゝ迎へられた。前記碑文中にもその名の記されてある藤井界雄師からも、又三島郡長片山三男三氏からも既に紹介のあつた旨を語られて、木村氏は快よく會談をしてくれられ、更に別室に案内されて同家所藏の良寛に關係ある遺品の殆んど全部を見せてくれられた。そのうち主なるものは左の如くであつた。

一 良寛禪師所持の笏

一 良寛禪師蒲團の切れ

これは淺黄辨慶縞木綿の至つて粗末なものである。

一 良寛自筆詠草二卷

これは立派に表装して黒塗の箱に藏めてあつて、箱の蓋に「良寛禪師眞筆和歌二卷、嘉永二年六月二十四日、木村元右衛門名物」と記してあつた。話によるとこれは良寛病みて起つべからざるを知るや木村氏に乞うて紙筆を求め長短歌數十首を書き、かたみとして木村氏に贈られたものだと言ふことであつた。歌はいつとなく詠んだものを思ひ出すまゝに順序なく書き列ねたものらしく思はれた。字には心持からか何處となく衰へが見えたが、しかも脱俗と云ふ特色に至つては良寛遺墨中無比のものだと思はざるを得なかつた。

一 『良寛上人御遷化諸事留帳』

これは半紙横綴の帳面で、天保二年辛卯正月六日即ち良寛示寂の時につくられた葬儀諸事留帳で、中について申慰者二百八十五人の名を數ふことが出来た。又取りおきを行つた佛家は六ヶ寺で、外に十二ヶ寺の僧が葬儀に列した事も知られた。一個の乞食僧の葬儀としては何と云ふ盛んなものだらうとそれを披見しながら私

達は話し合つた。

一 追悼歌集一卷

箱には「奉大愚良寛聖靈前」と記してあつた。これは良寛の墓の出来上つた天保四年三月四日の法要に際して親戚、知己の者等が墓前への手向に詠んだ追悼歌を集めたものである。

一 彌躰の自畫賛

紙本半紙に良寛自ら彌躰の畫を書いて、それに自ら詩を以て賛したもの、詩は詩集中に収めてある。

一 以南「朝霧に……」の句

これは半折に「朝霧に一段ひくし合歌の花 以南」と書かれた良寛の父以南の筆蹟で、最後の瞬間までも良寛が枕の下に入れて置いて離さなかつたと云ふ最も意味深い遺品の一つである。餘白に小さく「水壺のあとも涙にかすみけりありし昔のことをおもへば」と良寛の筆で書かれてあるのを見につけても、それを秘藏して居た良寛その人の心持の一端が窺はれるのである。

一 小屏風一雙

これは良寛の筆に成る色紙、短冊、扇面、書簡等を雜貼したもので、良寛その人を知る上には極めて重要なものである。「あいはせにすむとりはきにとまるひとはなさけのしたにすむ」と云つたやうな俗語もあれば、「雨のふる日はあはれなり良寛坊」と云つたやうな戯句もあれば「このよらはいつかあけなむ、このよらあけはなれなばおみなきて、はりをあらはむ、こひまろびあかしかねけりながきこのよを——由之老へ、良寛」と云つたやうな切なる實感を歌つたものもある。

一 二枚屏風一雙

良寛に關係ある人々の筆蹟を雜然と貼り交ぜたもの。「露にちり嵐にはづむ登かな」と云ふ以南の句などもあつた。

一 大屏風一雙

良寛が自作の詩を草書で書いたもの、良寛の草書としては代表的のものゝ一つであると思ふ。

一 絹本詩幅三幅

これも草書で詩一首づゝを書いたもので、前掲大屏風と共に良寛の草書の代表的なもの。

一 良寛畫像

頭の大きくて長い、黒衣を着て風呂敷包を肩に結びちぎれ草履をはいた一人の老僧水僧の後から子供が手毬を持つて追ひかけてゐる圖。筆者の誰なるかは判らないが、「華」の一字を墨し「千とせの家」の五字を刻した印章が捺してある。此の像に良寛の弟由之が左の如き賛歌を書いてゐる。

なき影は昔ながらの姿にてとへば空ふく風ぞこたふる

以上の如く數多くのいづれも意味の深い遺品を次から次へと閲覽し味讀することによつて私の心がいかばかり深い感動と、いかばかり複雑な想念とに充たされたかは、云ふまでもないことである。稻葉氏の助けを借りてあれこれと判讀しつゝ、私の手帳に寫し取つた歌や詩やその他の文字も我れながら驚かれるばかりの量に達した。それらの歌や詩はいづれ他の機會に取り纏めて紹介するつもりであるが、こゝで特に覺え書きをして置かなければならぬのは、左の如き一首の長歌についてである。

達は話し合った。

一 追悼歌集一卷

箱には「奉大愚良寛聖靈前」と記してあつた。これは良寛の墓の出来上つた天保四年三月四日の法要に際して親戚、知己の者等が墓前への手向に詠んだ追悼歌を集めたものである。

一 觸躰の自畫賛

紙本半紙に良寛自ら觸躰の畫を書いて、それに自ら詩を以て賛したもの、詩は詩集中に収めてある。

一 以南「朝霧に……」の句

これは半折に「朝霧に一段ひくし合歡の花 以南」と書かれた良寛の父以南の筆蹟で、最後の瞬間までも良寛が枕の下に入れて置いて離さなかつたと云ふ最も意味深い遺品の一つである。餘白に小さく「水莖のあとも涙にかすみけりありし昔のことをおもへば」と良寛の筆で書かれてあるのを見るにつけても、それを秘藏して居た良寛その人の心持の一端が窺はれるのである。

一 小屏風一雙

これは良寛の筆に成る色紙、短冊、扇面、書簡等を雜貼したもので、良寛その人を知る上には極めて重要なものである。「あいはせにすむとりはきにとまるひとはなさけのしたにすむ」と云つたやうな俗語もあれば、「雨のふる日はあはれなり良寛坊」と云つたやうな戯句もあれば「このよらはいつかあけなむ、このよらあけはなれなばおみなきて、はりをあらはむ、こひまろびあかしかねけりながきこのよを——由之老へ、良寛」と云つたやうな切なる實感を歌つたものもある。

一 二枚屏風一雙

良寛に關係ある人々の筆蹟を雜然と貼り交ぜたもの。「露にちり嵐にはづむ螢かな」と云ふ以南の句などもあつた。

一 大屏風一雙

良寛が自作の詩を草書で書いたもの、良寛の草書としては代表的のものゝ一つであると思ふ。

一 絹本詩幅三幅

これも草書で詩一首づゝを書いたもので、前掲大屏風と共に良寛の草書の代表的なもの。

一 良寛畫像

頭の大きくて長い、黒衣を着て風呂敷包を肩に結びちぎれ草履をはいた一人の老靈水僧の後から子供が手毬を持って追ひかけてゐる圖。筆者の誰なるかは判らないが、「華」の一字を墨し「千とせの家」の五字を刻した印章が捺してある。此の像に良寛の弟由之が左の如き賛歌を書いてゐる。

なき影は昔ながらの姿にてとへば空ふく風ぞこたふる

以上の如く数多くのいづれも意味の深い遺品を次から次へと開覽し味讀することによつて私の心がいかばかり深い感動と、いかばかり複雑な想念とに充たされたかは、云ふまでもないことである。稻葉氏の助けを借りてあれこれと判讀しつゝ、私の手帳に寫し取つた歌や詩やその他の文字も我れながら驚かれるばかりの量に達した。それらの歌や詩はいづれ他の機會に取り纏めて紹介するつもりであるが、こゝで特に覺え書きをして置かなければならぬのは、左の如き一首の長歌についてである。

てををりてうちかぞふればわがせこにわかれにしよりけふまでにとしをやとしをつれもなくあれたるやど
にたをやめがひとりしすめばなくさむることゝはなしになげきのみつもりつもりてかげのごとわがみはい
まさらにはありともありのみのありがひなしとおもへこそひとひにちたびしなめとおもひはすれどふ
たりのこ見るにこゝろのほたさへていはんすせんすべしらにかくりてねのみしなかゆあさなゆふなに

まそかゞみてにとりもちてけふのひもながめくらしつかげとすがたと

わかごとやはかなきものはまたとあらじとおもへばいとよはかなかりけり

これは一讀してある一人の不幸な婦人に代つて彼女の悲願を歌つた作であることが解るが、さてその婦人の何人であつたかについては何等の添へ書きもないのでつひに知ることが出来ないであつた。それは兎に角此の長歌が特に私の注意を喚起したわけは、つい數ヶ月前私の郷里糸魚川の牧家所蔵品中（牧家所蔵の良寛遺墨は凡て渡部村阿部家から定珍翁の第九子九郎次と云ふ人が持つて來たものである）から割愛してもらつた二首の長歌草稿と同巧異曲のもので、技巧上から良寛の歌を研究する上に極めて重要な作と思はれる點にあつた。私自身の藏してゐる其の二首の長歌と云ふのは次の如きものである。

わくらはにひとゝなれるをなにとかこのあしきけにさやらえてひるはしみらに門さしてよるはすがらに
人のぬるうまいもいねずたらちねの母がましなばかいなでゝたらはさましをわかくさのつまがありせばかい
もちてはぐゝまゝしを家問へば家もはふりぬはらからもいづちいぬらむらなくふるさとすらをくさまく
ら旅ねとなせばひと日こそ人もみつがめ二た日こそ人もみつがめひさかたのながき月日をいかにしてよをや
わたらむひにちたびしなばしなめとおもへども心にそはぬたまきはるいのちなりせばかにかくにすべのなけ

ればこもりてねのみしなかゆあさゆふことに

ひさかたのながき月日をいかにしてわがよわたらむあさでこぶすま

くさまくらたびのいほりにうちこやしとしのへぬればうづらなくふりにしさとにからころもたちかへりき
てあからひくひるはしみらにみづとりのいきつきくらしぬばたまのよるはすがらにひとのぬるうまいもいね
ずたらちねのはゝがましなばかひなでゝたらはさましをわかくさのつまがありせばかいもちてはぐゝまゝし
をいへとへばいへもはふりぬはらからもいづちいぬらむつれもなくよしもなけやにうつせみをよせてしあれ
ばひとひこそたへもしつらめふたひこそしぬびもすらめながきけをいかにわたらむかくすればひとにいと
れかくすればおさにさやらえかにかくにせむすべをなみこもりてねのみしなかゆあさゆふことに

あらたまのながきつきひをいかにしていかにわたらむあさでこぶすま

此の歌の内容については今日ではこれまで何人も觸れなかつた良寛傳中の隠れた一大事實の發見が私の手にを
さめられてゐるけれども、それは他日改めて公にすることとして、此の場合たゞ此の二首の長歌と前に掲げた木
村家所蔵の長歌との間に存する技巧上の關係について、讀者諸君の注意を促して置けばそれで私の望は足りるの
である。けれどもその事の爲めに、私は更に今一首木村家所蔵の長歌を寫し添へて置く事が一層重要なことゝ思
ふ。此の一首は『全傳』の編者に従へば、良寛が木村邸に於て老病に罹り死期を知つて詠んだ最後の詠歌だと云
ふことである。即ち

わくらばに人と生れるをうち離きやまふの床に臥しこやし癒ゆとはなしにいたつきの日にけに増せば思ふ

空安からなくに嘆く空苦しきものを赤ひらく晝はしみらに水鳥の息つきくらしぬばたまの夜はすがらに人のぬる安寝はいねず垂乳根の母がましなばかないでゝたらはさましを若草の妻がありなばとりもちてはぐゝまましを家とへば家もはふりぬはらからもいづちいにつれもなく荒れたる宿を現そみのよすがとなせば一日こそたへしもしつらめ二日こそしぬびもすらめ新田實の長き月日を如何にして明しくらさむすべをなみねをのみぞなくますらをにして

以上列擧した四首の長歌を讀み比べて味はへば、一方に於て人としての良寛の半面に觸れることが出来ると同時に、他方に於て彼の歌上の技巧の特色の一端をも窺ふことが出来るやうに思つた。

木村家所藏の良寛遺墨を一通り見せて貰つてから、私達は同家の番頭さんに案内されて木村家の菩提寺である隆泉寺境内にある良寛の墓に参詣した。隆泉寺は木村家のつい近くにある本派本願寺派の大きな寺で、本堂も庫裡も近頃改築したばかりと見えて、まだ十分に體裁がとゞのつて居なかつた。折から數日前に亡くなつた住持の爲めの盛大の法要が營まれつゝあつた。本堂の前の左手に片寄つて木村家寄進の立派な經堂が建てられて居り、その前に良寛の遺文揮毫にかゝる一基の碑が立つて居た。又堂裏に良寛の左の短歌一首を書いた額一面が藏してあつた。

いざ子ども山べに行かむすみれ見にあすさへちらばいかにとかせむ

經堂の前を通つて本堂の左側を眞直に奥へ入つて行くと、突當りの小高いところに立派な柵を繞らした墓地が見えた。掃き清められた石段がそこへと通じて居た。「あれが木村家代々の墓地で、良寛さんの御墓もあの中にあるのだ」と案内の人が云つた。石段を昇りきると、すぐに私の眼にはその中央に建てられた大きな石碑の面に

良寛禪師墓

と刻まれた嚴かな文字が讀まれた。花崗石を材として造られた其の墓碑は、高さ六尺幅五尺と云ふ大きなものであつた。碑面には中央に前記の五大字が大きく刻まれ、その左右には左の如き故人の選作が細かい字で刻まれてあつた。

落髮爲僧伽、乞食聊養素、自見己如是、如何不省悟、我見出家兒、
晝夜浪喚呼、祇爲口腹故、一生外邊驚、白衣無道心、猶尙是可想、
出家無道心、如之何其汚、髮斷三界愛、衣壞有相色、棄恩入無爲、
是非等閑作、我適彼朝野、士女各有作、不識何以衣、不耕何以哺、
今稱釋氏子、無行亦無悟、徒費檀越施、三業不相顧、聚首打大語、
因循度且暮、外面逞殊勝、欺他田野區、謂言好箇手、吁嗟何日瘡、
縱入乳虎險、勿踐名利路、名利纏人心、海水亦難澎、阿爺自度爾、
曉夜何所作、燒香誦佛神、永願道心固、似爾如今日、乃無不抵賴、
三界如客會、人命似朝露、好時常易失、正法亦難遇、須着精彩好、
母待換手呼、今我苦口說、意非好心作、自今熟思量、可改汝其度、
勦哉後生子、莫自濫墮飾。

國上のいほりにみましゝ時

やまたつのむかひの丘に小男鹿立てり神な月しぐれの雨にぬれつゝたてり

天保二年正月六日諱辰

從孫 橋 泰 世 拜書

此の建碑は良寛示寂と殆んど同時に弟由之父子によつて計畫され天保四年三月に至つて漸く竣工、其の四日に盛大な三周忌の追善供養と共に建てられたものと云ふことである。私達は其の墓碑の前に跪坐して、暫く黙拜をつづけた。言語を絶した嚴肅な気分が私の全心に沁み渡るのを覺えた。此の良寛の墓の左側に、良寛の弟無果花苑由之の墓が並んで立つてゐる。これは由之自身の意志によつて、こゝに建てられたものと云ふ。碑面には『由之宗匠墓』の五字と、「行く水はとどまらなくにうらふれて河原のよもぎなまねくらむ」と云ふ故人の歌一首が刻まれ、左側に「天保五年在甲午春正月十有三日卒」と記されてあつた。私達は其の墓をも黙拜した。

更に此の墓地の右の隅寄りにやゝ小さな一基の墓碑が建てられてゐた。それは木村家代々の墳墓であつた。私達は良寛、由之二人者の墓に比べていかにもつゞまじやかに建てられた此の木村家の墳墓を見て、自家の墓地の大部分を他の者の爲めに提供した上に、更に自家の墓をかゝる状態のまゝにあらしめた木村一家の人々の心持を、ひどくゆかしいもの、貴いものと思はないでは居られなかつた。しかも其のつゞまじやかに建てられた木村家の墓碑そのものに近寄つて、精細に之を観るに及んで、私は此の小さな墓碑の如何に貴いものであるかを知つた。墓石こそ小さけれ、その面に刻まれた文字は、悉くこれ良寛其人の筆に成つたものだからであつた。前面に刻まれた「南無阿彌陀佛」の六字の如何に神韻を帯びたることよ。更に側面に刻まれた年號から家名まで悉く良寛の手によつて書かれて居ることの、何と云ふ冥加であらう。私は此の木村家の墓前に立ちながら、良寛の如き隠れたる聖者をかくまで理解し尊崇し得た祖先の美しき行爲を、かくまで鮮やかに子孫に傳へる事の出来た木

村家の名譽を、心ひそかに讃嘆しないでは居られなかつた。

やがて離れたい心地を抑へながらそこを辭した私達は、案内の人に請うて細い裏道から木村家裏門に於ける良寛最後の庵住の跡を見せて貰つた。しかし、その庵は遠い以前に火事で焼けてしまひ、今日ではその趾に建てられた木村家所屬の材木小屋によつて辛うじて其の所在點が示されて居るのみであつた。

如仰此多は鳥崎のとやのうちに住居仕候信にせまくて暮し難く候暖氣になり候はゞ又いづ方へもまゐるべ

く……………

しはす廿五日

良 寛

定 珍 老

かう云ふ手紙が渡部村阿部家にあるところを見ると、それはひどく狭い（良寛にさへ狭いと感じられたほどだから）ところであつたらしいけれども、しかもつひに最後の瞬間まで良寛はそこを去る事が出来なかつた。尤も木村家當主の話によれば、初めはたゞ出来合ひの建物の中へお入れ申して置いたが、後にそれを造作して一寸した庵のやうにしつらへたのだと云ふことであつた。併しそんな事はどちらでも好いことで、免にも角にも良寛の最後の數年がこゝで送られ、最後の息がこゝで引きとられたと云ふ事實のある以上、此の場所は永遠に一個の靈場たるべきである。

晩年にはあまり外出はされなかつた、他出されても決して泊つて歸られるやうなことはなかつたさうである

——かう云ふ事も木村家主人の口から話された。

私達は今木村家の材木小屋となつてゐる其の良寛終焉の地點——木村家の門前には前述の如く大きな碑が立つ

てゐるが、こゝには何の紀念すべき印がない——間近に佇立して、あたりへ生え繁つた木々の枝に啼きしきる蟬の聲を聴きながら、やゝ暫く黙想に耽つて居た。

やがてそこを立ち去らうとした時の案内者の話に、木村家主人は要事が出来て今し方外出されたとの事であつたので、私達は再び木村家を訪ねて主人に禮を述べるところを略し、そのままそこから停車場へ行くことにした。

午後三時三十六分小島谷の停車場で新潟行きの汽車に乗り込んだ稻葉氏と私とは、同四時十何分かに地藏堂驛で下車し、殆んど駈けるが如くそこから二十町程ある國上村字中島の原田家へと急いだ。此の原田家（附近の人は多く新堀村の原田家と呼びならはして居る）は、矢張良寛と交りの厚かつた少数者の一人鶴齋原田有則翁及び其の子正貞（又は維則）翁の家であつた。當時の原田家は代々醫を業として居た。良寛の長歌に

つぬさ生ふ岩坂山の山陰のみてらの梅を三日月のほのみてしよりさ根こしの根こしにせむと置立つ長き春日をしのびかね夕さりくればあち群の村里いでゝ旗すゝき大ぬを越えて千鳥なく磯邊をすぎて眞木立てる荒山さして岩が根のこゝしき道をふみさくみ辿り辿りにしぬひつゝみ垣に立てば人の見てそよやといへば下部らはおのがまに／＼手をあかち鐘うちならしあしびきのみ山もさやに笹の葉の露をおしなみ呼び立てゝみちも無きまで圍みけり然しよりして世の中に花盗人と名のらへし君にはませどいつしかも年のへぬれば小山田の山田守るやのあしの屋の伏せやがもとに夜もすがら八束のひげをかい撫でゝおはすらむかも此の月ごころは

新玉の年は消えゆき年は經ぬ花ぬす人は昔となりぬ

と云ふのがある。此の有名な「花盗人」が即ち原田鶴齋翁であつた。鶴齋翁は林國雄、藤原光枝など云ふ當時の

和學者や歌人等を師友として、歌や詩に於て多くの佳作を遺した。良寛よりは七歳の年少であつた。

道をたづね／＼私達は四十分ほどを費して原田家に着いた。原田家の當主は年はまだ若かつたが、いかにも趣味の豊かな精神的な傾向の人で、特別私達を歡び迎へてくれた。早速話は良寛の事に落ちて行つたが、話してゐるうちに私は此の原田家の當主ぐらゐ深い理解を以て良寛に對してゐる人は、おそらく此の地方にもさう多くはあるまいと思つた。「世間ではこれまで良寛と云ふ人をたゞ飄逸とか脱俗とか云ふ特色ばかりを主にして觀て來たが、吾々はむしろ良寛を寂寥の人、孤獨の人、一日として自己の情感を歌はないでは居らなかつた人——さう云つた方面から良寛その人の内部へ這り込んで觀たい。」かう云つた意味の私の考を最も正當に受入れてくれた人は此の人であつた。

私は此の人といつまでも此の良寛と密接な關係を持つて居た家のうちで、心ゆくまで語り合ひたいやうに思つたが、汽車の時間の都合や何かの爲めにその出來なかつたのはひどく残念であつた。そこで私達は凡ての他の事を措いて、早速其の家に藏せられて居る良寛關係の文書や其の他の遺品を觀せてもらひにかゝつた。良寛その人の文書は横卷二卷に裝して特に珍藏されて居た。その中には和歌の詠草もあれば詩稿もあれば書翰もあつた。又以南、由之、眺鳥齋、泰世等良寛の肉身者の書翰や詞藻や藤原光枝、貞心尼等良寛と師弟の關係ある人の歌や書翰なども少なからずあつた。良寛の詩歌にはこれまで世間に紹介されてゐないものも少なくなかつた。更に良寛が愛用して居た薄茶々碗一箇と、良寛みづから作り良寛みづから愛玩して居たと傳へられる手毯一箇とに至つては、たまらない懐しさをそゝる珍品であつた。

しかし、今それらについて私のくど／＼しい説明を加へることの煩はしさを避けて、私はその後受け取つた原

田家の當主勘平氏からの懇篤な報告をそのまま茲に掲げる事にする。

……(前略)……

良寛禪師の研究者は——少くとも禪師に興味を有する者は、其の好友たりし新堀村の醫師原田鶴齋及び正貞の名を記憶せらるゝなるべし。田連居は其の居宅にして亦余が茅屋なり。

林國雄は鈴廻舎の門人として、「二神三名考」「日本書記寫誤考」「三元論」等の著者として當時の和學者なり。一名眞楫、常盤舎と稱せり、和歌に於ては藤原光枝と共に良寛が師友なりしは人の知る所。嘗て北遊の際、『田連居記』を作る。

井出の左大臣と聞えしは玉川の井出のほとりにすみたまひ、つゝみの中納言とうけたまはるは加茂川のつゝみに家居したまへりとぞ。さるは、其居る所によりて家の名によぶこと常のならばしなりけり。こゝには越の道のしり蒲原のこほりの田つらなか中島にひほりといふ所にそこら廣くきよめたる家ありやがて田つら居と號く。この田つらはかぎりなくひろくゆたけき田の面なれば奥津御年の種おろすより殖生して秋田がりおち穂ひろふをり／＼のながめつくることなしそれをまなびの意としてかぎりなくひろく奥つみとしの實に出でいにしへ人のひらひもしけむおちほをひらひとりてめづらしき歌をもみ出なんかし。

ものまなび秋のたり穂のたりみちて田つらの宿につめよとぞおもふ

世の良寛研究家にして、談其の周圍の人に及ぶや鶴齋と正貞とを以て同一人視するものあり。鶴齋は鶴齋にして正貞は正貞也。鶴齋は歌に於ては有則と號し、正貞は維則又は正貞と號す、花盜翁は鶴齋にして斷じて正貞に非ざる也、此の誤をなすもの豈只西郡氏や榮樓氏のみならんや。さらば請ふ余をして暫らく先人の跡を辿

らしめよ。

鶴齋は國上村字眞木山庄屋原田仁左衛門の三男にして寶曆十三年に生る。幼名常七、後安永八年改名して宗四郎と稱し、天明五年二十三歳にして分家し、寛政五年鶴齋と改めたり。

分家してより眞木山に在ること實に三十二年。年五十五即文化十四年一家五人を率ゐて今の中島に移轉し、文政十年六十五歳を以て卒す。中島にある實に十年間也。

余が父嘗て録して曰く

鶴齋翁諱有則號十畝園又號新川俳名木夫老後隱居寮加茂驛曰餘年齋盜梅之後人字曰盜梅老人法諱道明文政

十亥年二月十六日卒

良寛と鶴齋との交友に就きては

暮投閑々舎

良寛

自從一破家散宅。南去北來且過年。一衣一鉢訪君家。復是凄風疎雨天。

彌生の十日ばかり飯乞ふとて眞木山てふ所にゆきて有則が家のあたりを尋ねれば今は野良となりぬ一本の梅のちりかゝりたるを見て古をおもひ出でよめる

その上は酒にうけつる梅の花土におちけりいたづらにして

等によりて將又花盜人に與へたる長歌によりて人口に膾炙せるもの、而かも鶴齋の詩文にして、良寛の詩歌にして世に現はれざるもの少しとせず。以下良寛研究者の爲めに資料を供せんとす。

春日宿良寛法師五合庵

鶴齋

欲得半閑入彩霞。東山仄路夕陽斜。前潭波隱相無凍。庭園枝寒未着花。
客摘春蔬醅綠酒。主斟雪水煮清茶。高僧愛元風騷客。惟德不孤三兩家。

題良寛法師破木椀

何處得此器。云拾竹林來。非是寒拾物。可必陶林盃。

題破木椀答

良晨星道遙。寒衣步東臯。以杖挑幽篔。下谷清泉洶。燒香盛朝粥。
和羔充夕餐。文彩雖不全。良知出處高。

鑿池同良寛法師賦

閑暇無多事。鑿池破綠荷。魚腥放看樂。菡萏佃須併。客蔬文洗硯。
僧來諸幼灰。自效君屢問。芳月此含盃。

良寛法師賦呈

早已秋風至。日々待君遲。芭蕉猶未破。好是賦新詩。

贈良寛法師

一時振錫出塵寰。蹈遍白雲萬壑山。寄語洞天秋月夜。拾得桂子落人間。

十月二日良寛法師至將歸有詩次韻答謝

今朝草々將歸去。山徑蓬蒿露未乾。別後年寒君莫怪。田園優竹自平安。

尋良寛上人

苔徑傍溪水。來尋丘岳陰。雪深燈火影。鳥和木魚音。數聽無常偈。
難灰一片心。不嫌驚跌坐。重開古禪林。

花見にまかる僧のもとへ

天津空風のまに／＼行く人は雲井のよその花も見らむ

國上なる五合庵をたづね登りて

國上山のぼりて見れば木立ふり高根たかねに白雲かゝる
ぬば玉のよは明ぬらむあしびきのねぐらを出づる鳥のこゑ／＼

良寛法師が草庵へよみてつかはす

國上山おもひやれとも浮雲の立へたよりて見るよしもなし
國上山をさゝかりもてふく庵の嵐の風やさむけかるらむ

良寛法師いたれりける時に

しめゆひし庭の梅が枝咲にけりけふなほやとれ鳥の來鳴かん
天津空かぜふくことの君しあればきませる宵に梅の花さく

四日光枝師定診とよもに國上山五合庵を

とぶらひ侍りしに

岩かねの正木のかつらかけくれは柴の俣に白雲のある
植おきし池の蓮葉よひ／＼は君待かほに露ぞこぼるゝ

植おきし蓮の露は玉なれやとけてかけなむ君が袂に

良寛法師が朝とくいたれりける折によみて遣侍る

國上山路わけぬらむ墨染の袖のうつらふ秋萩の花

おなじくかへりたまふ時に

天つたふ秋の日和も夕暮の岡の松風いざとやたてる

良寛法師にこたへて申すとて

しら露を玉にぬきてよ君かきる衣のうらに掛けてしも見む

また

ことの葉にむすふもはかな女郎花はなの名たよぬ露の心を
をりて後たれかいふへき女郎花はなに心を露もおかねは

美豆枝うしひとやとりてつとめてかへらむと

するところにて

やまかけのすきのいたやに雨はふりこね

良寛

ますたけの君かしはしとたちとまるへく

こたへまつる

わすれめや杉のいたやにひとよみし月

美豆枝

ひさかたのさちなき影の静けかりしを

うへのふたくさのしらへをうけたまはりて

あしひきのかたやまかけのうもれ水にも

有則

時しあれはしつく白玉ならへて見るかも

その夜は法師と只ふたりして田つらに月を見侍りぬ

あさ衣袂はつゆにひちにけりしつか門田の月をななめて

有則

おもふとち門田のくろに圓居して夜は明しなむ月のきよきに

良寛

久かたの雲のあなたに住む人は常にさやけき月を見るらむ

良寛

圓居するこよひもあけて君いなは月にいくよの思ひそふらむ

有則

日にくいつこへまかると人のとひければ

あたなりと人はいふとも淺茅原あさわけゆかむ思ふかたには

良寛

かくなむ聞えければ

淺茅原ふみならず秋の露の身はむへあたなりと人もいふらむ

有則

良寛法師かもとにて

高根なる紅葉の錦ちらはきむ露のやとりは風のまにく

五合庵にのほりて

國上山もみちの錦たちあつゝ見れともさむし君なきいはは

良寛法師に申侍る

すみなれし國上の山にたつ雲を朝夕見つゝ君かしのはむ

良寛法師をまちえて

秋さむき露のやとりをむすひつゝ月のみかけをまちえつるかな

良寛法師か春いたらは來へきよしいひなから

來さりければ

春立ちてきまさむ君はあしひきの谷の鶯いまもなかぬか

すはやく法師かとひこしければ

くかみ山谷のしらゆきふみわけてかすみとゝもに君かたちきや

月あかき夜良寛法師人々ともなひつとひ給ひければ

我宿の庭の白露玉をなすたか衣よりちりやおつらむ

早春法師のもとへ申つかはす

此ころは雪まの若ないろ見えて朝な朝なに君そまたるゝ

良寛法師の許へ歌よみて遣はしけるに

あしひきの國上の山をもし間はゝ心におもへ白雲の外

と聞えし又のかへしに

白雲の外としきは朝夕におもひわすれぬ西の山の端

のかれてもおなし月日の影なればよのうき雲のあらずやはあらぬ

良寛

良寛法師のふみとゝこほりて春になりてとゝく

あまつ雁いつこに年やこえぬらむ春立つ空につたふ玉草

良寛法師花見にまかりて山に歸りたまふ時

よの中の花そ袂にこき入れて立ち歸るらむ白雲の山

御こたへ

世をいとふ墨の衣のせはければつゝみかねたり賤か身をさへ

良寛法師我が家を立ち出て給ふ日によめる

いつこにかやとりやすらむさみたれのふりとふりぬるこの夕くれに

良寛法師へ申侍る

とくなゆめけふゆふ衣の下ひもにちよの思ひをかけてこそやれ

春の野のかすみに生ふる若草のつまはつまゝし袖はぬるとも

良寛禪師より詔齋に宛てたる手簡、既に散逸して唯左の一に過ぎず。

此四月十六日光枝老人死去被致候其事は渡部酒造衛門殿方へ申來候御知らせ申上候以上

なにもみなむかしとそなりにける

なみたはかりやかたみならまし

正月十七日

詔齋老人

良寛

すみなれし國上の山にたつ雲を朝夕見つゝ君かしのはむ

良寛法師をまちえて

秋さむき露のやとりをむすひつゝ月のみかけをまちえつるかな

良寛法師か春いたらは來へきよしひなから

來さりければ

春立ちてきまさむ君はあしひきの谷の鶯いままなかぬか

すはやく法師かとひこしければ

くかみ山谷のしらゆきふみわけてかすみとゞもに君かたちきや

月あかき夜良寛法師人々ともなひつとひ給ひければ

我宿の庭の白露玉をなすたか衣よりちりやおつらむ

早春法師のもとへ申つかはす

此ころは雪まの若ないろ見えて朝な朝なに君そまたるゝ

良寛法師の許へ歌よみて遣はしけるに

あしひきの國上の山をもし問はゝ心におもへ白雲の外

と聞えし又のかへしに

白雲の外としきけは朝夕におもひわすれぬ西の山の端

のかれてもおなし月日の影なればよのうき雲のあらすやはあらぬ

良寛

良寛法師のふみとゞこほりて春になりてとゞく
あまつ雁いつこに年やこえぬらむ春立つ空につたふ玉草

良寛法師花見にまかりて山に歸りたまふ時

よの中の花そ袂にこき入れて立ち歸るらむ白雲の山

御こたへ

世をいとふ墨の衣のせはければつゞみかねたり賤か身をさへ

良寛

良寛法師我家を立ち出て給ふ日によめる

いつこにかやとりやすらむさみたれのふりとふりぬるこの夕くれに

良寛法師へ申侍る

とくなゆめけふゆふ衣の下ひもにちよの思ひをかけてこそやれ

春の野のかすみに生ふる若草のつまはつまゝし袖はぬるとも

良寛禪師より調齋に宛てたる手簡、既に散逸して唯左の一に過ぎず。

此四月十六日光枝老人死去被致候其事は渡部酒造衛門殿方へ申來候御知らせ申上候以上

なにもことみなむかしとそなりにける

なみたはかりやかたみならまし

正月十七日

良寛

調齋老人

舘齋が野積に盗梅したる逸事は榮樓氏著一八七頁西郡氏著三一九頁の長歌によりて明かなり。大村光枝亦詠頭歌一首を寄す。曰く、

花ぬす人にまをし侍る

美豆衣

色になる心のきはみ盡しけむ君あしひきのさかしきひちをよはにこたえつゝからきめを見て彼保昌が禁中花ををりしは思ふ女か故なり是は只色香をつめる心のあまりに思ひすゝみし盗人のいとみやひたるかな。舘齋晩年加茂に隨居して餘年齋といふ。隱居の原因明かならず。梅を愛して舘齋と稱する名木加茂に傳はれりと聞けど、今所在を知るに由なし、或は今の鶴又館の邊なりと言ふ。

舘齋の遺稿に詩稿一卷三吟一把藁一卷はいかしの連歌一卷歌稿卷あり、皆珍とすべし。

正貞は舘齋の長男也。幼名太一、寛政元年を以て眞木山に生る、年十六即ち文化元年正貞と改名して醫業を始む。何人の門に入りたりや明かならざれども大村光枝の周旋によりて江戸に遊びしこと光枝の手簡によりて明也。

光枝より舘齋翁に宛てたる書面に曰く

御子息御よみ歌扱々感心仕候是れは天然と被存候御出精被成候は北方に於て一旗御上可被成候云々

是に依つて正貞が和歌の實力想ふべし。

正貞の遺稿散逸して殆ど纏まりたるもの無し。其の良寛との交友は父舘齋を通じて也。かりに二十歳より良寛に應酬したりとすれば禪師が五十三歳の文化五年以降にして其の示寂の天保二年に至る二十三年間なりとす。はるのゝに若菜つまむとさすたけの君かいひにしことはわすれず

歳暮たまはり忝受納仕候

しはす二十九日

良寛

正貞老

如仰新春之御慶目出度申納候今宵御酒一樽忝をさめ候寒氣も此のころはゆるみ僧も快候

はるといへはあまつみそらは霞そめけり

やまのはにのこれるゆきもはなとこそ見ゆ

正月四日

良寛

正貞老

如仰新春の御慶何方も目出度申納候隨て野僧無事に住山仕候繪期永春時候頓首

正月廿一日

良寛

正貞老

夏衣たちてきぬれとみやまへはいまた春かも鶯のなく

ひとりぬる旅寝のゆかのかかときにかへれとやなく山郭公

まくらへは蟲ならば

良寛

正貞老

國上の山にのぼりて

正貞

かりねつゝほり江の小舟こぎかへりまたもきて見むみねのもみぢば

くかみ山のぼりて見ればま帆あげて佐渡の港をわたる舟見ゆ

おなじ夜そこなる寺に宿りて

よあらしにふりくるものは雨ならでのきばにつもる落葉なりけり

かへらむとしけるに山の主のよみ出けるうた

此山のもみちもけふをかぎりかな君しかへらば色はあらし

岩室の田中にたてる松を見て禪師の君の「笠か

さましを」と詠ませたまひし昔のしのばれて

さらでだに秋は夕のかなしきに袖こそぬらせ松の下露

是れ所蔵の良寛禪師遺墨と正貞老の斷簡中に散見するもの、蓋し多くは世に表はれざるものに屬す。

宅に良寛の遺物三品あり、曰く笏、曰く御手作の毬子、曰く春雨と名くる湯呑是也。而して笏は往年武石貞松氏の手に入り、近年寒山和尚の手にありといふ、寒山師よく日夕受持して五合庵主人を辱しめざるか。

他の二品今尙有り。古色狷すべき手毬は禪師が、

袖裏毬子値千金。謾言好手無等匹。箇中得意若相問。一二三四五六七。

と吟じたるもの。刺繡も亦禪師の作にかゝり、紅葉然たるあり、植木鉢然たるあり、日蓮草然たるあり、あざみ然たるあり、或人曰く禪師の精神這箇中に在りと、余曰く何ぞ其繪の齋藤與里君の作に似たる、所謂フラスコ式のハイカラならずやと阿々大笑したりき。赤城山人箱に記して曰く

きみが名はながき春日にこの手まりつきせず代々に傳へやはせむ

良寛

正貞

湯呑春雨は樂燒の大茶碗なり、箱書に曰く

こは良寛禪師七日市山田氏に得て愛給ひしも余が父田連居翁に付與し給ふ所なり、翁もまた春雨のつれづれにいとめで、春雨と名付く、

維則誌

古道具店に陳列せばまさに三文の價なかるべし。余は茲にも無用の言を提唱せずむばあらず。

……(後略)……

かの日夕やみがほんのりと讀んである文書の上しにのび寄る頃、私達は慌て、原田家を辭して、地藏堂の停車場まで駆けつけ、三たび巻町へと戻つた。地藏堂町には中村卯吉氏と云ふ有名な良寛崇敬家があつて、そこには有名な良寛の自像畫、紙數五十枚ほどの歌稿、良寛自筆の受取證、良寛の父以南と退歩といふ俳人との連歌、良寛の弟橋香の『遊居住記』等多數の貴重な資料が藏されてあると云ふことであつたが、その日はつひにそこを訪ねるだけの時間がなかつたのは、かへすも残念であつた。しかし、例の高橋氏に依頼して、右所藏品中最も私の心を惹きつけるやうに思はれた良寛の自像畫だけは其の日のうちに寫眞に撮つて貰つてある筈なので、辛うじて私は私の心をなだめることが出来た。

八月四日――

七月十八日一先づ良寛遺跡めぐりの旅を打ち切りにして歸郷した私は、再び他の要事かねて八月一日出發、魚沼地方を巡遊して、此の日北魚沼郡の小千谷町から三島郡寺泊町へ来てその照明寺と云ふ眞言宗の寺に泊るこ

とになつた。その寺には折から三島郡教育會の夏期講習會が開かれてゐた。私はその會の講師宿舍に充てられてゐた部屋に仲間入りをさせて貰ふことになつたのである。

寺泊の町は海の中から突立つた山の崖を削つて東西に細長くつくられたやうな町で、昔から有名な港である。右には彌彦山が高く聳えて居り、左には觀音岬が遠く海中に突出して居り、前には海上僅に二十一湊を隔て、佐渡の島山が夢のやうに浮んでゐる。眺望のすぐれた點でも、此處ぐらゐなところは日本海岸を通じてさう幾ヶ所もあるまいと思はれる。

由緒ある古跡や趣の深い建て方をした殿堂も少なくなく、而もそれらはいづれも町の背後に續いた丘陵の松林の間にあつたので、一層ゆかしく感じられた。私の泊めて貰つた照明寺はさうした建物のうちでも最も宏壯で、位置も最も良いところにあつた。その寺の境内にある觀音堂は越後三十三番の札所で、わけても尊げな建物であつた。高い石段を上つて此の觀音堂の前に立つて、更に後ろを向いて見ると、年古りた松の枝間から、紺碧の海と紫色に霞んだ佐渡の島がまぼろしのやうに見える。

此の寺のみ坂に立ちて眺めやる佐渡がしまべは夢の國かも

私の口にはおのづから此んな言葉が口ずさまれないでは居なかつた。

しかし、さうした事よりも何よりも、私にとりて此の觀音堂が懐かしく感じられたのは、そこが良寛の最も意味深い遺跡の一つだからであつた。二十餘年の孤獨な雲水の旅から歸つて來た良寛は、どうしたわけか自分の生家のあつた出雲崎には留らなかつた。しかもあまりに遠くへ去りも得ずして、其の附近二三里の間をあちらこちらと身を容るゝに足る空庵の類を求めて轉々してゐたらしい。出雲崎から海岸づたひに寺泊へ來る途中にある

郷本と云ふ村のとある空庵にも彼は暫く足を留めたと傳へられる。出雲崎郊外の中山と云ふところの草庵にも居たことがあると傳へられる。而して歸國後三年、即ち享和二年の頃には彼は此の照明寺觀音堂側の密藏院に居たと云ふのである。

寺泊 照明寺 境地 密藏院 假住之時

觀音堂 側 假草庵、綠樹 千草 獨相親、時著 衣鉢 下市朝、展轉 飯食 供此身。

良寛自身もかう歌つてゐる。しかし、惜しい事には其の密藏院は天保年中の火災に焼失して、今日では見るこゝとが出来ないのである。私はやゝ暫くそこに立つて、さまざまの想像に耽つた。「時著衣鉢下市朝」と云つたやうな飄々とした托鉢僧の姿が眼にちらついたり、草庵裡の爐邊に柴折りくべつゝ薄暗い燈火の光のうちに獨りさびしく夜を更かしてゐる貧僧の姿がぼんやりと腦裡に描き出されたりした。そして偶然にも自分が、一夜なり二夜なりを、かうした意味のある場所に泊めて貰ふやうになつたことに、私は稀な歡びを感じずには居られなかつた。

その日は更に此の地の野澤、前田二氏の好意によつて、此の町の外山家に秘藏されてあつた良寛の書いた同家過去帳及び觀音和讃二篇を見せて貰ふことが出来た。それを見るに及んで、私は始めて良寛の妹のむら子と云ふのが、此の町の外山家へ嫁してゐたのだと云ふことをおもひ出した。そして其觀音の和讃が全部平假名で努めて読み易いやうに書いてあるのを見て、それはおそらく其のむら子の爲めに書かれたものであらうと云ふことを想像した。それと同時に、私は良寛が特に此の地を選んで暫くでも居住したのは、おそらく又其のむら子との縁故があつたからであらうとも想像した。以上の遺墨と同時に、私は矢張此の地の本間家と云ふ名家に藏せられ

てみたと云ふ左の如き一篇の詩の寫しを買った。

本間山齋

因禮觀音來此地、正是前山夕陽暮、庭階蟲鳴秋寂々、野草開花沒杖滋。

その夜私は此の寺の現任職で、かねて此等の現在の堂宇の再建者であるところの佐伯大弘師にも面會して、何かと良寛のことについての話を聞いた。私は更に此の地の名家本間香浦翁をも訪ねて、話を聞きたいと思つたのであつたが、翁が久しく病床裡に籠居してゐられることを聞いて、断念した。寺泊の町は海水浴客で賑はうてゐた。私の泊めてもらつた照明寺は郡教育會の夏期講習會の宿舍に充てられてゐた爲めに、こゝも非常に混雜してゐた。しかし、私は部屋を同じくした郡長片山氏、講習會講師白神氏等と共にしめやかな一夜を過すことを得た。夜に入つて夏には稀な暴風雨がやつて來た。それでも私達の間には、

風の音波のひゞきもみほとけのたふとさそふるこゝちこそすれ
と云つたやうな、却て一種の崇嚴な氣分が漂ふのを覺えた。

八月七日

五日は他の要務の爲めに西蒲原の巻町へ行つて一泊、六日再び寺泊へ戻つてそこで一泊、七日には私は片山氏の好意で江部氏と云ふ案内者を得て、一緒に出雲崎へ行つた。出雲崎は寺泊から海岸に沿うて行けば四里程の道のりしかなく、それに良寛が歸國當時假の宿りを求めたと『北越奇談』にある郷本と云ふ村もその中途にあるので、私はその道をとらうと望んだのであるが、前々日の暴風で道がひどく悪くなつてゐるからと云ふので、やむ

を得ず汽車で行くことにした。寺泊から長岡鐵道に乗り、大河津で越後鐵道に乗りかへてそこから四つ目の出雲崎驛で降りた。が、出雲崎の町は、そこからは北へ山一つ越えた一里先にあつた。私達は先方へ約束してあつた時間の都合もあつた爲めに、そこから更に人力車に乗つた。道は車に乗つてゐるのが却て苦しいほどの山道であつた。眠の下に谷合ひの村を見て通るやうなところもあつた。今にも倒れさうに突立つた崖の下をびく／＼しながら通るところもあつた。

さう云ふ間を通りながらも、私の想像には時々そのあたりの道をとぼ／＼と辿つてゐる一人の托鉢僧の姿がちらつて見えた。

出雲崎にしへ人のふみにけむ道をたどりてわれも行くかも

かう云つたやうなこともしみ／＼感じられました。

こんな風にしてほど一時間も過ぎたかと思つた時、車はとある小山の端を廻つた。と、その刹那私達の眼の前に突如として海——ひろ／＼とした海が展開した。その刹那の驚きと快さとはまつたく云つて見やうのないものであつた。私は思はず感嘆の聲を發した。佐渡の島山はこゝでは今迄私がどこで見たよりも鮮やかに、美しく見えた。

荒海や佐渡によこたふ天の川

から芭蕉の歌つたのも、こゝであればこそと思はずには居られなかつた。出雲崎の町はすぐ眼の下にあつた。つい先頃焼けたばかりの焼跡を中央にして、東西に一本長く／＼伸びた崖下の港町は、たまらなく私にはなつかしく見えた。わが良寛の生れた町！ わが良寛の育てられた町！ そしてわが良寛が剃髪した町！

坂を下つて出雲崎の町へ入つた私達は、先づ大字尼瀬町の耐雪佐藤吉太郎氏を訪ね、佐藤氏の指圖で矢張尼瀬町の熊木と云ふ旅館へ入つた。案内された部屋は海の中へ造り出した中二階で、欄に倚つて見ればすぐ自分達の座の下で波が打つてゐる。ひろくとした海の眺め——佐渡の島も居ながらにして見ることが出来た。

いにしへにはあらぬものはありそみと向ひに見ゆる佐渡の島なり

天も水もひとつに見ゆる海の上に浮び出でたる佐渡が島山

垂ちねの母がみくにと朝夕に佐渡が島べをうち見つるかな

かうした良寛の歌や、

佐渡と出雲崎や筋かひ向ひ橋をかけたや船橋を

と云ふ俗語などがおのづと口ずさまれるのであつた。

最初私が出雲崎を訪ねようと思ひ立つた時の希望では、同じく出雲崎に泊るならば、良寛の出家した光照寺に泊めてもらひたいものだと思ふにあつたが、しかし佐藤氏の話によると、光照寺は先住が先頃他へ移轉した爲に目下その後住問題や何かでごた／＼してゐるから、却て不愉快な事が多からうとの事で、急に計畫をかねて此の熊木旅館を宿とすることにしたのであつた。けれどもかうして此の家に入つて見ると、私はこゝも亦得がたいところだと云ふやうな気がした。しかも、此の家の今の主人壽平氏の夫人は良寛と最も關係の深かつた渡部村の阿部家の女であると聞くに及んで、私にはます／＼此の家に泊つたことがうれしき事に思はれた。

出雲崎も寺泊も同じく遠い昔から有名な港で、兩港相並んで佐渡が島へ渡航の關門とされて來た。日野資朝、小倉實起などを始め佐渡への配流者の此の港から船出した者も古來少なくなかつた。更に又此の町は古來趣味の

旅行者の多くによつて、その自然美を賞せられた點に於て、北陸海岸他に多く其の比を見なかつた。従つてその種の旅行者として此の地に來遊した名のある人々は驚くべく多かつた。芭蕉、支考、曉臺、十返舎一九なども來た。龜田鵬齋、吉田松陰、頼春水なども來た。橋守部、近藤芳樹、前田夏蔭なども來た。雲泉、吾適なども來た。就中數奇の畫家鉏路雲泉の如きは三年も居て、つひに生を此の地で終つた。かうした過去のさまざまの人の去來の姿を回顧しながら、此の地の自然に對してゐると、更に又さまざまの感興が私の胸に湧き起るのであつた。

私はやゝしばらく窓に凭れて眞夏の日に照らされてゐる海を眺めてゐた。港内には僅二三艘の小さな荷積和船の外には何ものゝ影も認められなかつた。見渡すかぎり港内にも港外にも波のうねりは見えなで、海はまるで眠つてゐるやうに見えた。海に向ふに長く横はつてゐる佐渡の島は丁度夢の中で見る山のやうであつた。右の方には遠く突き出た岬の上に高く彌彦の山が端麗な姿を現はしてゐる。凡ては靜かであつた。凡ては夢のやうであつた。しかし、かうした靜けさのうちにあつても、私はいつとなしに秋から冬へかけての日本海の荒れ模様を思ひ合はせずには居られなかつた。そしてそれと同時に、私は今かうして夢のやうな靜けさのうちに浸つてゐる此の町の、その頃の物凄さや淋しさを想像しないでは居られなかつた。こんな事を何かと思つてゐるうちに、私の心は矢張いつの間にか良寛その人への聯想を喚び起してゐた。私が今對してゐる此自然を朝夕に見つゝ育てられた良寛の少年時代乃至青年時代の初期——それを私はおのづと想像に描かないでは居られなかつた。ふと私の眼に、すぐ間近の波打際で、パチャ／＼泳いで居る、五六人の子供の群がとまつたにつけても、私は彼等のうちに少年時代の良寛の佛を求めた。そして口碑の傳へてゐるところをおもひ合はせて、幼い頃から他の子供と交は

ることをあまり好まなかつたと云はれてゐる少年榮藏（良寛の幼名）が、唯一人群から離れてギラ／＼と日の照る岩の上に坐つてぼんやり海を眺めてゐた姿を空想に描いたりした。

たちねの母がみ國と朝夕に佐渡が島べをうち見つけるかな

またしても良寛の此の歌がおもひ出された。そしてそれと同時に、さうした懐しさを以て朝夕にあの夢のやうに見える佐渡の島山を眺めつゝ、更に心ひそかに勤王の志を抱いてゐた父以南から折にふれて聴かされたであらうところの其の島を舞臺にした古來のさま／＼な時代的犠牲者の悲劇についてのとりとめのない空想を描きつゝ、いつまでも／＼磯邊に立ちつくしてゐたらしい、やゝ物心づいてからの彼の姿をも想像して見た。私は雪と嵐と浪と凄まじく荒れ狂ふ冬の日などに、終日薄暗い家の内に閉ぢこもつて少年時代の良寛は果してどんな風に時を過してゐたであらうか——そんな事もさま／＼に想像して見たりした。

兎角するうちに、午飯の膳が運ばれた。私の心は空想の世界を去つた。私の肉體はいつとはなしに快い涼しさに引きしまつてゐた。それまで何處かへ行つてゐた井部氏もその時戻つて來たので、共に涼しさを賞しながら飯を喫した。食事中に宿の主人熊木氏が

いにしへをおもへばゆめかうつゝかもよるはじぐれのあめをきゝつゝ

と云ふ歌一首を書いた良寛の色紙一葉を持つてやつて來た。私はその色紙を見ながら熊木氏にたづねた。

「貴方のところは阿部さんと極近い御親戚だと云ふ事ですから、さぞ良寛さんのものが澤山おありでせう。御差しつかへがなかつたら見せていたゞきたいものですが……」

けれども主人の答は意外であつた。

「いかにも阿部とは親戚ですが、何しろ阿部の家では良寛さんの筆蹟は紙端一枚と雖も他人にやつてはならんと申すことが、やかましい家憲の一ヶ條となつて居りますので、とても私共などには及びもつきません。此の色紙一枚も私が多年心がけて居た結果やうやくのことで或る骨董屋から手に入れましたやうなわけで、これが宅での一つの寶なんですよ」

主人の此の答は私には意外であつたが、しかしこれと反對の答を聞いた以上にうれしかつた。私は重ねて問うた。

「この邊ですら良寛さんのものを得ることがそんなにむづかしいんですかね」

「いや、とても／＼」かう主人は即座に打ち消して「何でもずつと以前此の町で死にました醫者で大層良寛さんの贋せを書く名人がありましたので、贋物ならば随分澤山ありますが、良寛さんの遺墨だと云つて自慢の出來さうなものには此の町にはほんの二三しかありません……尤も以南さんや由之さんのものならばいくらもあるやうですが」

「良寛さんの生家の橋家には澤山あつたでせうね」

「無論あつたのでせうが、何しろ橋屋はその後ひどく零落しまして、家人も今では此の土地に居ないやうな次第ですから」

「それで家や屋敷はどうなつてゐるのですか」

「それですつて！ 橋屋の家は私共の宅と同じやうに海側にありまして、かなり大きな家でしたが、近來表の方

を人に譲りまして奥の方だけを自分のものにして持つてゐるのですが、何しろかまはないものですから、ずるぶ
んひどくいたんで居りまして、住むことも出来ないやうになつて居ります。先頃まで遊廓の檢査院が借りて居り
ましたが、それすら家が荒れてゐる爲めに居りきれなくなつて他へ移轉してしまひました。今は先達ての火災で
焼けた女郎屋が借りて入つて居ますが、それとて永く居るのではありませんから、これを機会に屋敷を全部買収
してあのあばら家を取り拂ひ、その跡へ一寸した堂を建てたらと云ふので、佐藤吉太郎さんが目下奔走してゐら
れるわけなんです」

「なる程さうなくてはならんわけですから。どうかまあ佐藤さんのお力でその計畫を成功させていたゞきたい
ものです」

そんな話をしてゐるところへ、丁度折よく佐藤氏が見えたと云ふ取つきがあつたので、私達は食事を終つて其
の人を迎へた。佐藤氏は號を耐雪と云つてホト、ギス派の俳人として越後ではかなり名の聞えた人である。又最
近では縣下の代表的な漁業家として廣く認められてゐる手腕家である。しかし、どちらかと云へば、氏は地方の
隠れたる民心開發者の一人として最もよくその特色を示してゐる。氏がこれまでに自分の地方の人心開發のため
に爲し來たつた努力は決して僅少なものはなかつた。現在に於ても氏は此の地方に於ける漁業發展の爲めの新
計畫に多大の努力を費しつゝあると同時に、他方に於ては傳ふべき歴史に富んだ此の出雲崎の編年史の編纂に着
手しつゝ、更に此の地に於ける良寛の遺跡を記念せんが爲めに大愚山良寛寺と名づくる一小堂を良寛出生の地點
に建立しようと奔走しつゝあるのである。私は今此の尊敬すべき先輩と相對して、一種の感激を禁じ得ないので
あつた。

佐藤氏について良寛の人格、閱歷、藝術等に關するさまざまの味の深い話や、大愚山良寛寺の建立に就ての苦
心談や、出雲崎の歴史についての説明などを聴いてから、氏に伴はれて良寛が得道した尼瀬の光照寺を訪ふべく
出かけた。光照寺へは宿から一二丁しかなかつた。此の町も寺泊と同じく神社や寺院は凡て背後の丘陵上に建て
られて居た。高い急な石段を上つて私達は其の懐しい寺を訪うた。此の寺を此の土地の人は特に禪光照寺と呼ん
でゐる。それは他に今一つ光照寺と名の真宗の寺が此の町にあるからであつた。そこは境内の眺望が甚だ佳か
つたが、建築はあまり立派なものではなかつた。今の堂は寛政十年九月の火災後に建てられたもので良寛の居た
頃のそれではなかつたが、佐藤氏の話ではそれ以前の堂も今のとほさう大した差がなかつたらしいとの事であつ
た。本尊は釋迦牟尼佛であるが、寶物として傳承せられてゐる三光觀世音は越後三十三觀音札所の十九番として
有名である。本堂に參詣した後で、私達は方丈の間へ案内されて、そこで暫く休んだ。その部屋の楣間に良寛の
筆になる最も特色的な草書三字の額が掲げてあつた。良寛の遺墨の現在此の寺に藏せられてゐるのは、これだけ
だと云ふことであつた。良寛に關する史料とても何一つなかつたのであるが、しかもこゝが良寛その人の得道し、
修業して居た跡であるかと思ふと、何となく去り難い氣がした。しかし、庫裡の方では法要か何かの準備と見え
て、多勢の女や男がごた／＼してゐたので、私達は間もなくそこを辭した。外へ出ると庫裡の二階の窓から四五
人の若い坊さん達が顔をのぞかして私達を見た。私は彼等のうちにも良寛の幻影を追はないでは居られなかつ
た。

そこから出た私達は、佐藤氏の案内で有名な孝女百合の墓（碑文は白河樂翁の筆）のある多聞寺や、芭蕉の
「荒海や……」の句を刻した古碑のある妙福寺を訪ねて、更に町筋へ出で、最後に、橋屋の跡だと云ふとある家

の前に立つた。そこはあまり見かけのよくない、煙草屋と駄菓子屋(?)との間の路地の入口で、その路地の奥に見える家(今は焼出されぬ女郎屋が借りてゐる)。昔の橋屋の一部であるとの事であつた。しかしあまりに取り亂され、あまり見苦しくされた其のあたりの光景は、私には、何等の感興を起させなかつた。むしろそれは私には「こんなものを見なければよかつた」と云ふほどの反感をさへ與へた。けれどもこれが現實だ、罪はむしろ間違つた私の主觀の求め方にあるのだ——かうみづから反省しないわけにも行かなかつた。半ば皮肉な気分になつた私は、「乞食僧良寛の生家の跡としてはこの方がむしろ趣が深いぢやないか」と云つたやうな事をすら思つたりした。

その日はそれから佐藤氏の別墅——町の背後の山上に建てられた何から何まで三角形に出来てゐる小庵へ伴はれて、そこで夕ぐれまでを過した。そこでの佐藤氏の話に中山と云ふところの庵が、良寛が縁の下に生えた筈を伸ばしてやる爲めに縁を破り天井を破り最後に屋根を破りまでしたと云ふ逸話を残した場所だと云ふことであつた。又此の町の淨文寺と云ふ寺へ嫁し老後難髪して妙現尼と稱した、良寛の妹みか子の歌が非常に優れてゐること、そしてその歌集は三冊に自書されて今でも保存されてゐることなども話された。更に先刻行つて見た橋屋の跡だと云ふ家の直ぐ向ひ側の路地の上に見えた神社が、石井神社と云つて代々橋屋が神官をつとめて居た社であると云ふ事も、こゝへ來てから佐藤氏によつて話された。

佐藤氏と別れて私達二人が宿へ來ると、もう電燈がついてゐた。すぐに私達は湯に入り、夕食を喫した。海はだん／＼暗くなつて、沖にはチラ／＼漁火が見え始めた。その夜は私は町役場樓上に催された講演會に行き、そこから歸つて來てから、佐藤氏をはじめ五六の人々と酒を飲み話を交へしてゐるうちに、時計が十一時を打つた

ので慌てゝ客人は歸り、私達は寢についた。私達の枕の下では絶え間なく波の音がしてゐた。

八月八日——

朝早く此の町の永瀧文一郎氏の訪問を受けた。永瀧氏とは私は一寸ではあつたが東京での舊知の間柄であつた。先づさまざまな追懐談を交へた後に、永瀧氏は此の町の鳥居氏と云ふ家に良寛一家の歴史に関する頗る重要な古文書の保存されてゐる事を話した。其は良寛の弟由之及び其の子馬之助(泰樹)——ひいては橋屋一家にとりての重大事件の公文書で、やがて良寛の生涯にとりても深い意味のある資料であるとの事であつた。そして是非私にそれを見て置けとの事であつた。私の心は此の思ひがけない報告を得て躍つた。早速私は永瀧氏に伴はれて其の鳥居氏と云ふ家を訪ねた。

鳥居家では歡んで迎へてくれた。そしてすぐに其の文書を出して來て見せられた。披いて見るとそれは次の如きものであつた。

乍恐以書付、返御訴訟奉申上候。

比留間助左衛門代官所越後國三島郡出雲崎百姓八十四人惣代、惣兵衛、權右衛門奉申上候。當町名主左衛門並同人伴馬之助儀、年中不用の人集めいたし乘馬貳疋近伺置、御武家様同様の身持いたし權威を振ひ奢増長仕候に付、近年借金相嵩み町方えは無體の出金割懸け、小前百姓困難爲致、別而去々亥年十二月中也金貳百兩町方え助合相頼候得共、無謂金子出金いたし候上の事故、小前承引不仕候處、出雲崎町之義者、佐渡々場にて大御用相動候に付、例年御救御拜借同様に御買請米被仰付、翌年四五三ヶ月に代金御上納仕來申候、然る處、

去々亥年御買請米之儀、名主左衛門親子並年寄聯合、小前には一向割渡不申横賣致し、既去夏中代金御上納差支候に付、名主左衛門儀缺落仕候間御支配表に御訴申上、御陣屋より御手代中御出役の上、小前より賈敷御取立辨納仕候、尤其砌り名主役無之候ては諸御用御差支に相成候間、其段申立候處、長百姓之内、長兵衛並同人伴眞吉兩人假役被仰付御取向執計則ち左衛門義は行衛日限尋被仰付候間、所々相尋候内同郡島崎村に忍居、百姓方江差越候文通寫

此度一件之初發貳百金助成之義は、兼て得心とは申ながら、我等數年御役中、對町方寸功も無之、剩度々大金を割出し、一統え難儀をかけ其上此度者御役所御取立に相成、別而難澁のやからも有之よし、誠以後悔の至に候、然る上は對御役所え申譯も無之、町家え向ひ面目を失ひ候仕合に付、自後勤役の存念聊無之候。仍て家事取締方一統相談の上宜相定、我等病身退役之趣被願立、馬之助一人動にて家名相續爲政度此旨一向頼入候。尤自分一身廢亡におよび候といふとも、毛頭遺恨無之候間、草分より此かた數十代合體の好身を以て、宜敷衆評頼入候事。

子六月

橋 左衛門

右之通申越、其後町方え立歸り候處、御役所より右長兵衛眞吉兩人兵直に名主假役御免被仰付、左衛門親子從前之通名主役相勤、以前より猶々我儘増長仕候。右體のもの名主役致居候ては、町方及襄徴殊に是迄品々無謂金子割懸け、其上御買請米横賣いたし辨納爲政候始末御吟味相願候處、去る子七月より此節迄八ヶ月に相成候得共何の御沙汰も無御座、殊更、左衛門義名主役相勤候身分にて一旦脱落いたし立歸り候ても一應の御礼明も無御座其儘に被差置候始末、乍恐御役所之御執計何共難得其意御義に奉存候。

一金四拾兩、是は寛政二戌年上納方差支相頼候節相遣候。
一金五拾兩、是は同三亥年上納方辨金相願候付差出候分。
一金四拾兩、是は同十年上納方引戻辨納相頼候に付差出候分。
一金貳百兩、是は去子六月御買請米代金引戻缺落仕候に付辨金仕候分。
一金三百兩、是は當時陣屋之義、想名は出雲崎と唱へ出雲崎尼瀬兩町懸りに尼瀬町地内に御座候。
然る處六ヶ年前申年、右陣屋場所を出雲崎町え引取度旨無益之儀御支配江戸御役所追て願出、大江戸詰往返共過分之儀無之處、右之通り三百兩取立申候、日數貳百五日相懸候に付一日金壹兩貳分程相成、其上町方において左衛門留守中諸品買掛りの金銀多分有之候も、右願中諸難用に差支候由申、町家小店向えも一向拂方下仕候、勿論右難儀勘定合一向小前えは不申聞我意計相頼候儀に御座候。

一町入用萬難と申し、壹ヶ月總五十貫文餘々宛毎月取立壹ヶ年六百貫文餘に相成申候、前々は右半減にても相濟來候處、拾餘年以來右之通過分に取立申候、尤右遣拂一向爲見不申稀には見届度旨小前より申出候もの有之候得共、任權威に難題申懸け相掠候に付壹人共掛合儀相成兼差控候得者、彌以權威に募り非道私慾而已仕、小前一同難儀至極仕候儀に御座候。

前書申上候通、名主左衛門義權威而已強、町方え難儀相懸け、右ヶ條申立候外にも品々無謂出金爲致候分も有之、別而去々亥年御買請米金引戻仕候に付、同人義も自分難立相心得候哉一旦見落いたし候に付、御支配御役所より御手代中御出役之上、不納之分小前辨納御取立被仰付候程の事故、左衛門立歸り候は同人も相懐可申儀御役所よりも御差當可有之候處爲其儀、同人並仲馬之助義も以前通り名主役相勤候心底にて罷在候段、何共

難心得奉存候。右一件御吟味之儀も、去七月より數度御願申上半年餘も相立候得共不相分、年越にも相成候間當正月に至り兩三度御伺申上候處、御掛り御手代中御病氣又御差合有之候旨被仰聞御延引、剩取扱人申付候間右取扱人え掛合可申旨被仰聞候間、御役所より被仰付候由の取扱人名前のもの方え掛合候得は、御役所より被仰付候儀無之、縱被仰付候共、大造の名主私慾引戻には内、執計には難及義之旨申し一向構不申候。所詮御支配御役所にては右之譯合にて御吟味御決着無之彼是長引候程町方相治り兼難儀至極仕候、依之無是非今般証込御訴訟申上候。

何分以御慈惠右一件於御奉行様、見落之譯並諸帳面等御吟味之上、御陣屋元町方無難に相治候様被仰付下置候様奉願上候、右願之通り御開濟被成置候は、難有仕合奉存候以上。

文化二丑三月 比留間助右衛門御代官所

越後國三島郡出雲崎町

百姓八十四人 總代 百姓 惣兵衛

同 同 權右衛門

御奉行所様

此の一通の公文書によつて示された全くこれまで私の知らなかつた、又思ひもよらなかつた事實に對して、ひどく驚いてゐた私の前に、「これが事件の判決です」と云つて更に次の如き一通が差出された。

申渡

越後國三島郡出雲崎町

名主	左衛門
同見習	馬之助
年寄	伊八郎

出雲崎町百姓八十四人總代權右衛門外八人より、左衛門並馬之助伊八郎に相掛、勘定出入吟味伺之上此度、松平兵庫頭様、水野若狹守様、御下知之趣申渡。出雲崎町百姓八拾四人總代權右衛門、善兵衛、吉右衛門、金八、源右衛門、六右衛門、仁兵衛、太兵衛、金左衛門より、左衛門並馬之助伊八郎え相掛り、勘定出入無證據申争は雙方共難取用、町入用其外取立帳之類並拾壹ヶ年以前申年、左衛門其外のもの共出府入用帳、買請米割渡帳とも紛失爲致、勘定不分明にいたし又は書付も不取置、小前え可割渡買請米賣拂代金不相渡、其上左門儀、無沙汰に家出したし右御米代も不相納、小前不納之由伊八郎馬之助申立、町方より爲差出或は地子取立帳組替納印形等等閑にいたし置、特に小前えは皆濟目録も不見せ且御藏地代出目米をも小前もの共より爲差出、私慾無之由の申分難相立、馬之助は幼年の節之儀も有之と申年、右始末一同不届に付、左衛門は家財取上所拂被仰付、伊八郎は役儀取放過料錢五百文、馬之助は名主見習取放、權右衛門其外之もの共は不埒の節も不相關候に付無構、町入用並買請米代其外勘定合等之義は、諸帳面並之次第に付吟味之不及沙汰候。

午十一月

之によつて見ると橋屋が由之の代になつてから町民との間に未曾有の醜事件を惹起した事は明らかで、しかもその事件の結果は由之及び其の嗣子馬之助即ち眺鳥齋泰樹が追放の罰を科せられることになつてゐる。それは今

更知るべくあまりに大きな事件である。そも／＼此のやうな事件は、由之の代に至つて始めて勃發したものであるか、それとも既に以南、榮藏（良寛）の頃から徐々に醸成されつゝあつたものであるか、いづれにしてもそれは良寛その人の生活にとりても、重大な意味を有する事件でなければならぬ。こんな事を考へ始める事によつて私の頭の中は時ならぬ混乱を來した。私はつとめてさうした複雑な考の起るのを抑へて、その場合たゞ與へられた事實を出来るだけ有りのまゝに受け容れて行かうと試みた。そして更に良寛の筆蹟二三點と、守部、千蔭など云ふ人々の短冊をかなり多く見せてもらつて、そこを辭した。

しかし、宿に歸つてから更に先刻見せてもらつた公文書が、一層強い力を以て私に次から次へとさま／＼の疑問を強ひた。これほどの大問題があるのに何故これまでの良寛研究者によつてあれが閉却されて居たのであらう、そんな事さへ疑はれるのであつた。そこで何よりも先にとり、私は午飯を食べ終るとすぐ佐藤氏を訪ねる事にした。佐藤氏とはその事がなくとも訪問する約束をして置いたので、快く迎へてくれた。私は早速かの公文書についての話を持ち出した。ところが佐藤氏にはとづくにそれについての一通りの調べがついてゐるのであつた。氏は私の質問に應ずる爲めに、目下編纂中の出雲崎編年史の大部な草稿を出して來て、それによつて靜かに大體次の如く語られた。

「これは決して突發的な事件ではなくて、遠い昔の出雲崎對尼瀬の關係に胚胎してゐるのである。出雲崎と尼瀬とはもと二つの獨立した町であつた。それが一つに合併したのは上杉時代からである。そして代官所はずつと出雲崎の方に置かれて來た。それが寛永二年代官松下勘左衛門の時になつて代官所を急に尼瀬の方へ移すことになつた。出雲崎と尼瀬とは此の時から争ふやうになつたのである。

當時尼瀬の方は大庄屋は野口與左衛門で、出雲崎の方のそれは山本家即ち橋屋であつた。そして兩々相對して、勢力を競はうとしてゐた。しかし野口家の方の勢力が日に／＼旺盛となり、遂に代官所迄も尼瀬の方へ奪ふやうになつたわけである。之れに引き代へ山本家の方は代官所の移轉と共に、一層衰頹が著しくなつて來た。それでもうとて野口家の敵でないと云ふほどのところまで來た時に、山本家では一つは自家の勢力挽回の爲め、一つは出雲崎の名譽恢復の爲め、代官所を出雲崎へ復活させる運動にとりかゝつた。そしてしば／＼訴狀を其の筋へ出したが、一向効果があらはれないので、町民もつひに決心して江戸表へ出訴しても意志を貫徹させようと云ふことになつた。そして由之をして江戸へ出府させることにした。ところがどうしたわけか由之がその爲めに要した旅費は一日一兩二分と云ふ巨額なものであつた上に、彼の不在中土地の商人に對する山本家の諸式支拂が甚だ怠慢であつたらしい。而も他方に於て出雲崎町民間の統一が缺けて居る爲めに、いつとなくその間に全く反對の二派が生ずるやうになつた。即ち山本派と非山本派である。此の兩面の事情が原因となつて、つひにかの訴願狀の示す如き訴訟を提起するに至つたのである。

尤もかうした事は當の山本家に多少の資産さへあれば何でもなく解決する問題であるが、山本家は由來財産と云ふものは町屋敷少しばかりの外に殆んどなかつたので、事致に至つても如何とする事が出来なかつたのである。更に之れに先立つて良妻賢母の聞えの高かつた良寛、由之等の母即ち以南の妻秀子が死んで居た（天明三年）事も、山本家の財政整理上の大きな損失であつたらうと思はれる。

もと／＼此の橋屋對出雲崎町民の訴訟事件の起りは、橋屋の對抗者敦賀屋を中心とした一派の者の代官所に向つて開始した橋屋排斥運動によるものであるが、代官所の糺明に對して數字上の統計の即答が出来ない上

に、一面恐怖の念もありして後に三十一名の捺印者が出たり、又代官所の方でも數百年存続して來た橋屋の如き舊家に對して懲戒を加へるに忍びないで居たり、更に表面上四百七十餘人の橋屋擁護者があつたりしたので、反對派一派はつひに最後の非常手段を取つて時の奉行所に訴訟をさせるに至つたのである。

かくの如くして結局かの申渡文の示すが如き結果となつてあらはれ、由之は家財没收所拂、眺鳥齋馬之助は名主役見習取放ちと云ふ悲運を見るやうになつたのである。こんな風に永い間の變遷を見て來ると良寛の出家と云ひ、良寛出家以後間もなき以南の郷里脱出と云ひ、更に良寛最後の歸國以後に於ける出雲崎との關係と云ひ、由之、眺鳥齋等の他郷流浪と云ひ、いづれもその因て來るところがほとと察知されるのである。

更に之れは餘談であるが寛政十一年九月に橋屋家筋書を水原役所に提出せしめられた事實の如きも『良寛全傳』の編者西郡氏の解する如くそれが以南の死に關係のあつた事と見るよりも、矢張例の代官所争奪問題に關するものと見るべきであると思ふ。何となれば丁度由之が該問題の爲めに江戸に出府する前年の事だからである。云々

佐藤氏の以上の談話は、朝來混亂してゐた私の頭腦にとりては、うれしい光明であつた。之に導かれて私には更に見なほし、考へ直さなほさなければならぬ重要問題が良寛の生涯について幾つもあるやうに思はれた。

佐藤氏は更に良寛の父以南が古今を通じて越後に於ける俳人中の最も傑出した一人であると信ずる旨を語られ氏の手で集められた以南の句の多くをも見せられた。以南の句はこれまで世に現れてゐるものはほんの十數句にしか過ぎず、私もそれ以上にまだ知らなかつたので、佐藤氏の手記中から左の數十句だけを寫させてもらつた。

荒海や關をなごりの十三夜

まき竹のほぐれて月の朧かな

君戀し露の椎柴折り敷きて

木更や古寺の鐘つくんと

さまかへてのろりと出たり雲の峯

世やかはる我は老いぬる盆の月

昔今の人まぼろしにけふの月

(以上天真佛所載、西郡氏『良寛全傳』中にも載つてゐる)

水雞啼て蘆間の月の動きけり

嬉しげに籠を出る鶴ぞ哀れなり

涼しさや人おし分けて行く流

岩端に頭巾つかへる清水かな

十六夜や誰と問ふ間に月の客

蚤圍に啼く時聲遠し

荒海に月の朧となる夜かな

(以上盛並集所載)

際のかげほのくらしさくら花

うちへ来て見れば更けたり夏の月

雲間から星もこぼれてしぐれかな
星ひとつ流れて寒しうみのうへ
せらぎの分け行くばかりけさの雪
水仙花さはれば玉のひよきあり
朝霞に一段ひくし合歡の花
夜の霜身のなる果やつたよりも
ほととぎす見はてぬ夢のあとつげよ

(以上西郡氏『良寛全傳』所載)

下さかなの市にすべるや寒の雨

風やわづか放れて水靜

蘭の香や高樓更に涼しき夜

チナンチン千代と囀れ四十雀

○

夏かけに今こそ澄す心なれ

かはらす月も木々の梅雨時

瓜茄子宵々市に匂はせて

出合頭に無沙汰詫びけり

以南 且 仙 以
南 水 風 南

後妻は三十そこらと指さゝれ

神も浮世につれて御利生

水 風

淡雪に杉の實まじる雫かな

神農も見ゆるしたまへ河豚汁

梅ちりていよ／＼古き軒端かな

鶯や里の籠の朝茶時

とんぼうや妹山背山かけてとぶ

親ふたり見はてぬ夢ぞ夏の月

名月や秋の夕ぐれ行かへて

梅が香や風にみだれて絲の如し

それから佐藤氏は話をつとけて、出雲崎と云ふところは良寛をはじめとして古來名僧を多く出した土地だと云ふことを語り、良寛當時前後に於て出た人だけでも、釋大忍、長生院智現、開徳院法賢、欣淨院了實等の數四を擧げることが出来ると云ひ、更に明治に於ては小林日童の如き權田雷斧の如きがあることをも言ひ添へられた。が、やがて話は佐藤氏が目下計畫中の大叢山良寛寺建立のことに落ちて行き、いづれ近いうちにその計畫を發表して寄附金を天下に募りたいから其の節は幾分の力を致すやうにとの事で話は一段落を告げた。やがて私はそこを辭して宿に歸つた。

夜になつてから、小林昌吉氏の盡力で、私達は田中喜六氏祕蔵の屏風を見せて貰つた。良寛、以南等の詩歌の断片が澤山貼り交ぜにしてあつた。その中からも私は目新しい詩や歌を寫し取つた。

十一時頃寢に就いた。前夜と同じく靜かな波のさゝやきが絶え間なく枕の下で聞えてゐた。昨日來此の土地で見たり聞いたり考へたりした事のあれやこれやを思ひかへしつゝ、私は永く眠ることが出来なかつた。

この里の夏こそよけれよすがら枕の下に波の音して

いにしへの事々胸にゑがきつゝよすがら波の音かも

何ごとをおもへともよすがらわが夢みだす此の浦の波

一旦消した電燈を再び點して、こんな文句を手帳に書きつけて見たりした。

その翌日は離れがたい思を抱きながら、出雲崎の地を去つて再び寺泊の照明寺に引き返し、前日まで、そこに集つてゐた多勢の人達の去つた後の森閑と靜まり返つた庫裡の二階の廣い客室で、太弘和尚及び野澤、前田の二氏と共にしんみりした清談に一夜を過して、その翌日即ち八月十日に私は再遊を約して歸途に上つた。寺泊から大河津までの人力車の上で、私は始めて早稻がそろ／＼穂を出し初めたのを見た。そして秋の近づきつゝあることが、しみん／＼感じられた。私は更にさうした氣持に動かれながら、左手に近く立つてゐる國上山を眺め、そこにたゞ一人應じてゐた良寛——十數回の秋をそこで迎へ送つた其の孤獨寂寥の人の生活をおもつた。

良寛和尚の庵跡をたづぬる記

去年の夏、二回までも良寛和尚遺跡めぐりの旅に出ながらも、さまざまな事情に妨げられて、つひ一度もかの名高い國上山の五合庵跡をたづねることの出来なかつた事は私にとりてはどうしても忘れ去ることの出来ない遺憾事であつた。五合庵はまつたく良寛和尚にとりては菩提樹下とも稱すべき聖地であつた。彼の生涯の精華は最も鮮やかに此の山中の小庵に於ける彼の生活によつて示された。今日私達の尊崇措かないところの彼の藝術——詩も歌も書も、全くそこで完成された。隨て眞にしたしく彼れの生活を味はひ、彼れの藝術を味はんが爲めには、私達は少なくとも一度は此の山中の庵跡をたづねなくてはならないのであつた。しかも、因縁のいまだ熟するに至らなかつた爲めか、私は昨年の夏以來二回までその山の麓まで行つて居ながら、一度もそこをたづねるだけの機會を得なかつたのである。何と云ふ残り惜しい事であつたらう！ けれども、切なる念願はいつかは達せられないでは止まなかつた。私はつひにその機會を得た。それは大正七年十月二十六日（私は特にかう書いて置かなくては氣が濟まない）私の第三回目の良寛和尚遺跡めぐりの旅の五日目であつた。その前日は稀な秋日和であつた爲めに、折悪く流行感冒に冒されて居た私も、さほどの苦しさを感ずることなしに、日程通り牧ヶ花村の解良家を訪ねて、同家所蔵の遺墨の殆んど全部を見せて貰ひ、更にそのうちのおもなものゝ寫眞をもとることを得たのであつたが、其の日は朝早く目をさまして見ると、全く思ひもかけない雨降りであつた。感冒の方はどうか

期うにか熱もなくなり気分もよくなったやうであつたが、雨戸に吹きつける雨の音を聞いては、何うしても心細さを感じずには居られなかつた。私は思はず並んで寝てゐた寫眞師のT―君を呼びおこした。

「どうでせう、こんな風でも今日は豫定通り山登りが出来ようか」

「どうしてとす」T―君はまだ雨の音を聞きつけならしく、いくらか寝惚け聲で問ひ返した。「お感言がまだぬけませんですか」

「いえ感言の方はもう大概いゝやうですが、此の雨ではね」かう私は當惑を感じながら答へた。

「さうですね。随分ひどく降つてゐるやうですな」T―君は今更驚いたやうに云つた。

T―君のかうした驚きの言葉のうちには、「そいつはどうも困りましたな」と云ふ心持が明らかに讀まれるのであつた。

けれどもその時私は思つた。――こんな事ではいけない。これくらゐの雨で氣を腐らせてゐるやうでは又しても機会を逸してしまふにちがひない。そればかりか寧ろかうした秋の雨に濡れながらあの山中の鹿跡をたづねる事の方が、どれくらゐ良寛さまを偲ぶにふさはしいか知れない。

出かけよう――

そこで私は改めてT―君に向つて云つた。

「だが、これしきの雨は何でもありませんよ。出かけることにしませうて」

T―君も快く賛成した。そして私達は間もなく床を離れた。

やまだつのむかひの岡にさを鹿たてり神無月しぐれの雨にぬれつゝ立てり

着物を着かへながら、私はふと良寛和尚のかう云ふ旋頭歌を思ひ出したりした。

二

朝七時頃の汽車で私達は卷町を出た。一行は道案内の任に當つてくれたU―老人と寫眞師のT―君と私と三人であつた。汽車が進むにつれて雨は益々烈しく車窓を打つた。

「こんな風ではどうも山へ登れさうも思はれないね」

かうした言葉が時々思ひ出したやうに三人のうちの誰か知らの口から洩れた。しかしその度に同じく三人のうちの誰か知らの口から次のやうな言葉がきまつてそれに應ずるのであつた。

「なあに、大丈夫でさあ」

曇つた硝子窓をのぞいて見ると、茫漠たる蒲原平野は濃い灰色の雨雲に包まれて、たゞほんの手近かの田や村がぼんやりとさびしさうに見えるだけであつた。彌彦角田の山々は無論のこと、私達がこれから登らうとしてゐる國上の山さへ見えなかつた。「かうして出かけはしたもの……」と云つたやうな不安を、汽車の進むにつれてますますはげしく感じないで居られなかつたのは、おそらく私だけではなかつたであらう。昨日まではまるで感じなかつた旅の哀愁と云つたやうな氣持も、不思議に今朝は感じられた。稻の刈り取られた廣い田の中の道を歩いて行く菅笠を被り蓑を着た人の姿などが、妙に淋しさを誘つたりした。

汽車は規定の時間よりずつとおくれ九時少し前に漸く地藏堂驛に着いた。風はいくらか穏やかになつたやうであつたが、雨はとて止みそうになかつた。停車場を出て町つゞきの雁木下に入るまでに、私達の外套はもう

い、つぼり濡れてしまった。しかし一旦かうなつてしまふと、却て私達の心持は引き緊つた。そしてあの長い薄暗い地蔵堂の町をぬけて國上へ通ずる田の中の狭い道路へ出た頃には、私達は寧ろ豫期しなかつた愉快をさへ感ずるやうになつた。

「良寛さまもよくこんな秋雨の降る日に此の地を歩いて地蔵堂あたりまで托鉢に出かけしやつたでせうて」着物の裾をはしよつて、上に古ぼけた長い黒のマントを着、素足に齒の厚い高足駄を穿いて、先に立つて元氣よく歩いて居たU—老人は時にこんな事を云つた。

「まつたく、あの大きな笠を披り、桐油の合羽を着、片手に鉢の子を持ち、片手に長い杖を引きずつた良寛さんのとほくした姿がそこいらに見えるやうな気がする」私も半ば興じつゝこんな風に答へた。

「あの自畫像のある地蔵堂の中村さんは良寛さんとは親類の間柄だつたさうですね」

近頃になつて急に良寛通になつたU—君までがこんな言葉をさしはさんだ。

「さうです。それは中村さんと云はれて思ひ出したが、なんでも中村さんのところに「此の袴を何卒縮入におんなほし被下度候」とか「此の綿入を何卒袴に御なほし被下度候」とか云つたやうな良寛さんからの手紙があると云ふ話だが、そんな事を思ふと一層此の道がなつかしいやうな気がしますね」私もつい先頃はじめて聞いた話を思ひ出してこんな話をした。

こんな風に道々良寛和尚の話に興じながら、十時半頃私達は、國上村大字中島原田家に立ち寄つた。此の原田家も良寛和尚と最も親しい交りのあつた誰齋翁及び正貞翁の家で、和尚並に和尚の周囲の人々の筆蹟もかなり多く藏されて居るのであつた。それらの遺墨や文書類は去年の夏一度くはしく見せて貰つたのであるが、今回は

それらの中の幾點かを寫眞にとらせて貰つたり、更に又主人のいろ／＼の話を聞いたりしたい爲めに、立寄ることにしたのであつた。

ところが、私のさうした望みが十分に達せられた上に、案外にもそのかみの正貞翁の居室であつた部屋であつたかな午餐の饗應にまであつた。更に私達は主人の特別の好意によつて生涯忘れることの出来ない一つの悦びをさへ與へられた。それは午餐後私達は此の家の家寶として秘藏されてゐる良寛和尚遺愛の茶碗で薄茶の饗應にあづかつた一事であつた。その茶碗は粟田焼らしいかなり立派なものであるが、一二ヶ所縁のこぼれた所をついだ痕が見られた。そしてそれを容れた箱には正貞翁の左の如き箱書が添へられてゐた。

それは良寛禪師七日市山田氏に得て愛し給ひしもの余が父田遠居翁に付與したまふ所なり翁もまた春雨のつれづれにめでゝ春雨と名付く 維則誌

此の二つとありさうに思へない貴い紀念の茶碗を屏にあてた時、私は眼に涙のじむほどの感激を覺えずには居られなかつた。そしてほんの一しづくをすらも餘すのを惜しむやうな飲み方で一杯の茶を飲みほしてから、私は主人に向つて云つた。

「良寛さんもかうして此の茶碗で時々薄茶ぐらゐ飲まれたのでせうか。どうも、私だけの考では良寛さんに薄茶の用意などがしてあつたとは思はれませんがね」

「さあ」かう原田氏は笑ひながら答へた。「さうかも知れませんが、しかし、番茶ぐらゐは時々どつかゝら貰つて來て飲まれたでせうて」

「なるほど」私は更に云つた。「それにしてからが、良寛さんは一體どう云ふ氣でこんな茶碗なんかを貰つて來

られたのでせう。その事だけでも考へて見ると非常に興味のある問題ぢやありませんか」

かうした私の言葉は、その場合居合せた凡ての人々の意味深い哄笑を誘はずには措かなかつた。私達四人はしばらく聲をそろへて笑つた。

「何にせよ、良寛さまのこんだからきつと此の一つの茶碗で水も飲まつしやれば、湯も飲まつしやれば、又時々は粥も啜らつしやれば、味噌汁も啜らつしやつたこんでせうてね」U—老人までがこんな冗談のつもりでない冗談を云つて笑つたりした。

三

時計が一時を打つたのに驚いて、私達は盡きない興を強ひて破つて原田家を辭した。幸ひ風も殆んどなくなり、雨も餘程小降りになつた。しかし、これからいよ／＼純然たる田圃道になると云ふので、私達は——U—老人ばかりでなく——三人とも著物の裾を端折つた。中島の村を出はづれて泥深い田の中の道へ出ると、午前は全く雨雲の裡に包まれて居た國上、彌彦の山々が、中腹から下だけではあるが、う／＼と姿を現はし始めた。

「この按配では大丈夫山へも登れます」かう元氣よく云つてU—老人は相變はらず先に立つて歩を早めた。妙に迂回してつけられた田の中の道を小一里も歩いたり、大きな杉の木の密生して丘陵の裾を廻つたりして、私達がいよ／＼坂なりに一軒毎に一段づゝ高く家の建てられた國上村大字國上へ着いたのは、原田家を辭してから一時間後のことであつた。かなり強い傾斜のあるその村の坂道は、いたるところ薄暗く樹が繁つて居た上に、まるで道のない山の澤でも歩くやうに大きな石がごろ／＼してゐた。そのうへ、出がけに餘ほど小降りになつて居た雨

が、又してもどしや降りになり出した。

「随分ひどい道ですなえ」かうした同じ嘆息を私もT—君も幾度となく洩らさずには居られなかつた。「どこまでかうした道がつゞくのだらうか」時にはそのやうな不安をさへ感ずることがあつた。「こんな風でこれから國上寺までのぼるなんて事が一體全體出来ることなんだらうか」そんな事も考へられた。

しかし、U—老人だけはそんなことに少しも頓着しないらしく、たゞもう一途に此の村の村長の王木氏の家をたづねる事にばかりあせつて居た。老人は甚だ曖昧な記憶を喚び起して、村へはひるとから其の家をさがし當てようとおせつてゐたのであるが、村が盡きて道が暗い森蔭へはひる所まで行つても、それらしい家に出遇はなかつた。が、丁度その村端の崖下の谷川に菜を洗つてゐる女があつたので、老人はあわてて其の女を呼びかけて訊ねた。そして王木氏の家がすぐその谷川を隔てた數歩のところを構へた家であることが知れた。私達は目をつぶつても行けるやうに云つてゐたU—老人の記憶のあまりに無力であつたことを氣の毒にも思ひ、可笑しくも思はずには居られなかつた。

王木氏を訪ねて、しばらく休息を與へて貰つてから、私達は先づ同氏所藏の良寛和尚遺墨を觀せてもらつたり寫眞をとらせてもらつたりした。同氏所藏の遺墨は「白雲前興後……」及び「生涯懶立身……」の詩の草書半折双幅と、「來てみればわがふるさとあれにけりにはもまがきもおちばのみして」の歌の半折との二點であつた。いづれも甚だ出来のいゝものであつたが、就中歌の幅の巻どめの所に「國上山五合庵住僧良寛手跡、文政九丙戌六月」と云ふ文字の讀まれたのはゆかくしも亦うれしくも感じられた。文政九年といへば良寛和尚が此の村の乙子神社側の草庵を出て鳥崎村木村氏邸内へ入つた年であるから、此の歌はそれより以前に書かれたもの、恐らく

乙子湖畔の草庵時代のものと見なければならぬ。そんな事を考へると、此一軸は單に和尚の手跡が和尚の生前から人々の尊重することとなつて居たことの一つの證左として意味ある記念品であるばかりでなく、むしろ和尚の書風の變遷を知る上の一つの貴重な資料であることが知られた。

玉木氏の談によると、此の國上村大字國上の地は生涯を通じて、良寛和尚の最も長く留つて居たところであるにも拘らず、今日に於て良寛和尚の遺墨の藏されてゐるものが自分の所を除いて殆んど無いと云つてもいゝ有様であるとの事であつたが、その何故であるかについては玉木氏は何事も語らなかつた。

なほ五合庵についての玉木氏の話によると、良寛和尚在住當時の五合庵の如何なる體裁なものであつたかについては殆んど知れて居らず、たゞ現在五合庵跡として記念する爲めの小堂を建てゝあるその場所に明治三十年頃まで方九尺ばかりの四方無壁の小さな建物が立ち腐れにしてあつたのを見受けたばかりだとの事であつた。しかも玉木氏はそれについて説明を續けて云つた。

「ですが、あのやうな壁の無い小さな建物の中に、如何に良寛さまでも住んで居るわけには行かんかつたでせう」直接その建物を目撃したのでもない私には、玉木氏のその判断の正否は判じ難かつたけれども、さうした建物が何とかして今日までも保存してあつたらばと云ふやうな残り惜しさが感じられないでもなかつた。

いかにも味はひの豊かな人であるらしい老玉木氏の談話は、ひどく私の心を引きつけたが、どうしてか今日中に五合庵跡をたづねたいと云ふ私の念願は、談話の間にも私をせき立てずにはゐなかつた。幾度も口に出しかけては抑へて居た別れの挨拶の言葉を、私はつひに思ひ切つて口に出した。その時はもう時計の針は三時半を指して居た。玉木氏はひどく驚いたらしく、私の挨拶に對して俄かに何とも答へやうのない様子であつたが、やゝし

ばらくしてから

「それは意外でしたな。ですが、一體これからおのほりになるにしても、お歸りの道はどちらへおいでになるおつもりですか。せめてお天気でもよければですがなあ」かう云ふ驚きの言葉を冒頭に、しきりと「今日はこのまま自分の家に泊つて」と云ふことをすゝめられたのであつたが、さうした深切に對しては充分に感謝しながらも、私達は一つはどうせ苦しみついでだからと云ふやうな瘦我慢にも驅られて、とう／＼暇を告げて出かけた。玉木氏もつひには「まあ行けるなら行つて御覽なさい」と云つたやうな工合に私達の主張に氣のない同意を與へ、門まで見おくつて出て、すぐその門前から薄暗い杉の樹立の中へ通じた細い坂道を指して、「道はそれです」とま

で教へられた。

幸ひにも雨は再び小降りになつて、殆んど雨傘をささなくても済むほどであつたが、坂道の傾斜は一層急になり、凹凸もひどく泥も一層深くなつた。しかし、その代り私達の元氣は以前の比ではなかつた。

「まさか途中で日が暮れるやうなことがないでせうね」元氣よく出かけたものゝ時刻が時刻なので、私は一應かうした疑問もたしかめて置かないでは氣が済まなかつた。

「なあに、大丈夫です。どんなにぐ／＼して居つても五時までには國上寺へ行けますさあ」かういふ老人は快活に答へた。

「そんなことを云つても、もし案外ひまどつて山の中で暮れたらどうするつもりです」私は承知しつゝもかうした疑問を發して老人をからかつて見た。

「五合庵にでも泊めてもらひますかな」老人は笑ひながら答へた。

路が峻しくなり、樹立の茂りが深くなるにつれて私の心にはだん／＼詩的情趣の濕ほひが加はつた。

あしびきの國上の山の木下路を今日しもわれは辿るなりけり

あしびきの國上の山の木下路に幾たびかきくひよどりの聲

五合庵在住の良寛和尚が殆んど毎日のやうに上下したのは此の路だ——これだけのことを思ふだけでも、私の胸ははげしく波打つた。

夕ぐれに國上の山を越えくれば、高ねにはもみぢ散りつゝ、ふもとには鹿ぞ鳴くなる、もみぢさへ時は知るといふを、鹿すらも友をしておしむ、むべらへやましてわれは、うつしみのひとにしあれば。

わがやどをたづねて來ませあしびきの山の紅葉を手折りがてらに

かう歌つたその人は既に八十年前に此の世を去つてしまつたけれど、その人の人格の輝き、その人の藝術の生命は、今日に至つていよ／＼明らかに、いよ／＼いき／＼と私達の心を導く。現實は夢か、夢は現實か、私は今更の如く藝術は永く生は短しの一語の眞實味にうたれずには居られなかつた。

苔むせる老木の杉の下道にいくたびわれは立ちとまりけむ

そのかみのせじの姿をまぼろしに多きがきつゝのぼるその山みちを

たちとまりおもへば夢かうつゝかも國上の山の雨にぬれつゝ

出がけには何かと話に興じてゐた私達も、一步々深く晩秋の山氣のうちへ誘はれて行くにつれて、だん／＼

言葉少なになつて行つた。

秋雨にぬれつゝのぼるあしびきの國上の山はかうがうしかも

秋ふかき國上の山のそば路をわれらはのぼるうちもだしつゝ

その道のこよしかるこそなか／＼に君をししのぶよすがなりけれ

かなり高く上つてから私達は、「擔薪下翠峯、翠峯路不平、時息長松下、靜聞春禽聲」かう云ふ良寛和尚その人の詩をしみ／＼と思ひ出させたほどの見晴らしのいゝ所へ出た。そこには觀音像(?)を安置した方二間許りの、かなり立派な堂が建てられてあつた。私達は先づ其堂前に禮拜してから暫くその縁に腰かけて足を休めた。山には杉が多かつた。杉の木の黒ずんだ縁のところ／＼に楓、檜、樺などの紅や黄にもみぢしたのが點在して見えた。路ばたやら林の蔭には、穗を出した薄や萱を交へて、さまざまの草がそれ／＼特色のあるもみぢの色どりをを見せて居た。雨はやんだが、空はまだ灰色の雲が一面にとざして居り山風が絶え間なく響を傳へて居た。近くの林間ではコガラや四十ガラが啼きながら餌をあさつて居り、遠くの梢からは木舌鳥や鶉の叫び聲が時々思ひがけなく聞えて來た。

「良寛さまも時々村里への行き還りにこんな場所で休まつしやつたことでせうてな」かうU—老人が口を切つた。

「時息長松下、靜聞春禽聲。さう云ふやうな詩の出來たのも、すぐそこにあるやうな松の木の下でせうさ」かう先づ私は老人の話に合繩を打つた。

「擔薪下翠峯、翠峯路不平……老人は話の下からすぐに此の詩によしをつけて口ずさんで居た。

「良寛さんがどこかへ托鉢に行く途中、とある坂の上で休んだが、休んでゐるうちにどつちの方向から來てどつ

ちの方角へ行くかも忘れてしまつたらしく、しばらくしてから平氣で又もと来た方角へ歩いて行き、餘程遠くまで来て再び先刻その道で出遇つた樵夫に出遇つて注意されて、始めてそれと氣付いたことがあつたと云ふ逸話を聞いたことがあるが、その時良寛さんが休んだと云ふのもやつぱし斯う云つたやうな場所だつたんでせうよ」私はこんなことも話した。

私達がこんな風にして靜寂裡の快感に浸りながら、空想を走らせたり、話をまじへたりしてゐた間に、突然上の方からいづれも六十以上に見える婆さん達が、聲高に話しながら下りて来た。婆さん達はいづれも蓑を着、菅笠を被つてゐた。そして國上寺詣での戻りと見えて手に／＼珠數をかけてゐた。婆さん達が私達に會釋して通り過ぎようとする時、突然U—老人は

「五合庵までまだ大分あるかね」と訊ねた。

「なに、もうほんの一のぼりでござります」と婆さん達の一人が答へた。

これをきつかけに私達は云ひ合した如く立ち上つて、歩き出した。堂の前からはすぐに傾斜の一段と急な坂になり、おまけに道が二筋に分れてゐた。右の方の坂の上り口に「月見坂」と云ふ石の標柱が建てられてゐた。そして先刻私がお昔その根元に良寛さんが休んだらしいと云つた大きな松の木は、その月見坂の上り口にあつた。「月見坂！ 月見坂！」と私は頭の中でその名を繰返し返し讀んでゐたが、つひに私には良寛さんについて一つの逸話が憶ひ出された。それは龜田鶴齋が五合庵に和尚を訪うた時に、夕方和尚は鶴齋一人を庵に残して置いて自分酒を買ふべく村をさして出かけたが、途中月の美しさに見とれて、とある松の根元に腰をおろし、迎へに出た鶴齋に見出されて喚びかけられるまで凡てを忘れてゐたと云ふ話であつた。此の月見坂と云ふ名は、その逸話

に因んでつけられたものではないにしても、その場所が何だか良寛和尚のその逸話を生んだ所のやうに思はれてならなかつた。しかし、私達はその道をとらないで先刻婆さん達の下りて来た坂を上つた。

上にしたがつて坂が急になり、木立も茂くなつて、上古から靈場とされてゐた此の山の特色が歩一歩いみじく感じられた。そして到るところに私達は良寛和尚の詩を感じ、歌を思ひ、且その人の佛を見た。かうして上ること二三丁で、私達はつひに五合庵跡に達した。

「こゝだ、こゝだ」かう云ふ叫びが、道の左手の薄暗い杉の木立のかけに「五合庵」と刻んだ小さな標石を見出した利那、私達三人の口から發せられた。

索々五合庵、室如懸磬然、戶外杉千株、壁上傷數篇、釜中時有塵、籠裏更無烟、唯有東村叟、時敲月下門。

いざこゝにわが身は老いんあしびきの國上の山の松の下いほ

まつたく想像してゐたとほり、そこは實に淋しい、薄暗いところであつた。平地と云つては、僅に二十坪ぐらゐしかなく、うしろは老杉蔭暗く茂つた山が蔽ひかぶさつて居り、前はすぐ崖になつてゐて、谷の間から遠くかすかに渡部村の裏山が見えるばかり、すぐ下の森かげにかなり大きな寺が一つあるが、それとて良寛和尚の當時からあつたものかどうかわからない。すく／＼と伸び立つた杉の木からは、しきりに葉が落ちた。訪ねる人が少ないと見えて、地上には人の足跡が残つてゐなかつた。

庵跡の入口に二本の丸木が立てられて形ばかりの門とせられ、粗末な柴の袖垣らしいものを添へてさへあつた。何人の手に成つたものか、私にはそれをそこに拵らへた人の氣持がたまらなく懐しまれた。

山をうしろに崖を前にして、そこに方二間の茅葺の宛庵が建てられてゐた。その建物は昔ながらの五合庵でな

いことは充分明かに解つてゐたが、それでも私には誠に私の額をすりつけて拜みたいほどの貴さとなつかしさが感じられた。狐格子から覗いてその薄暗い、空つぽの内部を見た私の眼には、いつとなく涙の滲んでゐるのを感じた。私はやゝしばらく其の縁に腰かけたまゝ、殆んど放心に近い状態で居た。その間、私は一緒に来た二人の道伴れのあることなどは、全く忘れてゐたのであつた。

たづね来ていよ／＼こゝとおもふさへわれには夢のこゝちこそすれ

堂の前の空地の崖際に、これも何人が植ゑたのかひよろ／＼とした菊が二株三株、やう／＼の事で咲いたと思はれるやうな小さなさびしい花を十ばかりつけてゐた。堂の前庭には一むらの竹と、二三本の椿と、一二本の美しく紅葉した楓との外には樹木はなく、たゞ雑草のみが到るところに生ひ茂つて、時候柄いづれひ凋落の色を見せて居た。堂の横手の心持ち小高くなつた空地には青黒い苔の蒸した數基の墓標が立つて居て、中央の一番大きく一番古いものゝ表には、「久賀躬山五合庵開基祖慈海阿闍梨——享保二年春三月二十有三鳥」と刻されてあつた。此の萬元阿闍梨こそは良寛和尚の常に追慕措かなかつたと云はれる此の庵の開基であつて、此處に孤住した十四年の間良寛和尚が如何に心をこめて此の墓の供養に努めたかは、相像に餘りあるところであつた。

T君が寫眞をうつす準備に熱中し、U老人が堂の縁に腰かけたまゝ四邊の風景に眺め入つてゐた間に、私はたゞ一人堂の周圍を右往左往しながらはてしない情感と空想とに耽つて居たが、最後に私は堂裏にあると聞いた岩清水を探しにかゝつた。堂の背後は一間と間隔を置かずすぐ老樹鬱蒼たる山になつて居て、四五尺の高さほど削つた崖からは、雜草が生ひかぶさつて居り、地面は一面に落葉が敷うてゐるので、一寸見たゞけで清水のありかなどはわからなかつた。

そのかみの君が汲みけむ岩水を落葉かきわけさがすなりけり

まつたくその通り私は木の枝を折り、こゝと思はれた崖際の一角の落葉を掻きわけて、辛うじてそこに微かながらも水の湧き出て居るのを愛見したのであつた。そして

あしびきの國上の山の冬ごもり、日に日に雪のふるなげに、行き來の道のあるとも絶え、ふるさと人の音もなし、うき世をこゝに門さして、ひだのたくみがうつ繩の、只一寸の岩清水、そをいのちにて新たまの、ことのけふもくらしつるかも

さよふけて岩間のたきつ音せぬは高ねのみゆきふりつもるらし

これがその所謂「たゞ一寸の岩清水」であつたかと思つた時、私の眼には又しても涙の湧くのを覺えずには居られなかつた。

山かげの石間をつたふ苔みづのあるかなきかに世を渡るかな

と、自ら歌つて良寛和尚その人の清く且さびしかつた生活の味はひが、今この住む人なくして潤れようとしてゐる一寸の岩清水を見るにつけても、私にはしみ／＼味はれるやうに感じた。そして此の遠く人里を離れた北國の山中に、あのやうにして唯一人永い年月の間孤獨にして無礙な生活を営んでゐた和尚の貴い心境が、いやが上にも貴くなつかしく思はれると同時に、私はつひ昨日牧ヶ花村の解良家で始めて見出した良寛和尚その人の次の如き長歌を思ひ合はさずには居られなかつた。

うつせみの假のうきよはありてなき、ものともへこそ自妙の、ころもにかふるぬばたまの、髪をもおろすし
かしより、天津御空にゐる雲の、あともさだめずゆく水の、そこともいはずうちひさす、宮もわらやもはて

ぞなき、よけくもあれあしけくも、あらばありなむと思ひし身の、なそもかく、おもひはやまぬわがおもひ、人しるらめや此のころ、たれにかたらむ語るとも、いふともつきぬありそみは、ふかしといへど高やまは、高くあれど岸あれば、つくることありといふものを、かにもかくにもつきせぬものはわがおもひかも

世の中にかどさしたりと見ゆれどもなどかおもひのたゆことなき

やがて寫眞をとる準備が出来たと云ふT君の呼び聲に驚かされて、私は半ば夢のうちにあるやうな氣持でそこを離れた。そして寫眞をとり終ると、早々私達はそのなつかしい場所を去つて、更に國上寺へ上ることにした。谷間を透して仄かに見えてゐた麓のあたりには、もう村家の煙が漂ひ、谷合の木の間には何處からともなく黄昏の色が靜かに迫つて来るやうに見えた。「たそがれに國上の山を越え来れば……」と云ふ良寛和尚の歌の味がしみんと思ひ出されると共に、私の空想は矢張り良寛和尚その人のとほくした托鉢姿を、その坂道かしの木かげに描き出さずには措かなかつた。私は又私の此の稀有な感激に充ちた旅を記念する爲めに、路傍の林間から數片の紅葉を摘みとつて外套のポケットに收めることを忘れなかつた。一つは私自ら藏し置かんが爲めに、一つは又私の知つてゐる限りでの最も純眞な良寛尊崇者である大磯の安田氏に贈らんが爲めに……

五

國上寺は千餘年の昔から弘く世にその名を知られた巨刹であつた。又かの酒頭童子の前身が此の寺の稚兒であつたと云ふ傳説は、此の山と此の寺とに一種神祕な色彩を添へてゐる。更に私達には良寛和尚の詩歌を通じて此の寺が如何に崇嚴な感じを興へて來たかわからないのであつた。

時計を出して見ると、もう五時に間がなかつた。それに私達はもう大分疲れを感じた。しかも坂はますます急になり、樹立は一層深くなつた。雨は幸ひにも先刻から止んだまゝであつたが、林の蔭を渡つて來る夕ぐれ近い風は寒さの身に沁むのを感じさせた。國上寺まではどんなに坂が急でも僅かに二三四丁の道のりではないと云ふ事であつたが、その先山を下つて再び地藏堂の町まで戻る二里餘の道のことを思ふと、私達は亦今更のやうに心細さを覺えずには居られなかつた。

けれども、三人のうちの誰かどさうした事を口に出して云ふ度に、私達の間には必ず良寛和尚その人の話が持ち出された。

「良寛さまのことを思つて見るがいゝ」

私達は明らかにそれとは言はなかつたけれども、互に心のうちでさう云つたやうな言葉を繰り返しながら自らを戒しめ他を勵ましつゞけた。

こんな風にして私達は、刻一刻黄昏の色の濃くなりつゝあつた國上の山の杉の下路を上つた。やがて又しとくと降り出した冷たい秋雨に濡れながら……

大愚良寛 (終)

11259

昭和二十三年三月五日 印刷
昭和二十三年三月十日 發行



發行所

東京都中央區
日本橋通三ノ八

印刷所

東京都千代田區丸ノ内三丁目一二
東興印刷株式會社

印刷者

東京都千代田區丸ノ内三丁目一二
渡邊謹齋

發行者

東京都中央區日本橋通三ノ八
和田欣之介

著作者

相馬御風

大愚良寬

定價 百貳拾圓

株式會社 春陽堂

(會員證號 A-119033)

年 月 日 418

23.7.19	23.8.19	23.9.19	23.7.19		

閱覽濟

終

